

※中国語の原文に忠実に和訳しました。

「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」報告書

上海海事大学（南部中継大学）図書館館長、訪日団長 陳偉炯

1. 訪日団の概要



日本財団と日本科学協会の招聘を受け、日本から図書の寄贈を受けた「第5回中国大学図書館担当者訪日団」は、2011年2月15日から2月22日まで8日間の日程で日本を訪問した。訪日団員は、図書寄贈を受けている28館の中の24館の館長、副館長など26名で構成されていた。団長は寄贈図書の南部中継拠点である上海海事大学図書館の陳偉炯館長で、館長補佐の王慧さんが今回の訪日団の中国側の事務局となり、一行と共に訪日した。

2. 訪問の経過

今回の訪日団は、2月15日、北京、上海、大連の各空港から全日空便により成田空港に到着し、その夜は日本科学協会の伊藤隆常務理事から歓迎の挨拶を頂いた。

2月16日の午前中、日本女子大学田中功教授の講演「日本大学図書館の現状と最新の動向」を聴講して、熱烈的な討論を行った。その後、全団員が日本財団の笹川陽平会長と会見したが、会見を通して、団員たちの心には日本財団が中日友好のために行ってきた事業に関して極めて深い印象が残った。午後、訪日団一同は、日本大学法学部の図書館を訪問した。事務課の担当者が同館の状況を紹介するとともに、全館を案内してくれた。夜は、日本財団主催の盛大な歓迎会があったが、日本財団の前田常務理事、日本科学協会の伊藤常務理事等が出席され、中日の主客双方が親身に話し合い、楽しく、うち解けた雰囲気の中で熱気の会となった。

2月17日の午前中、日本科学協会が寄贈図書の整備を委託している倉庫会社を見学した。同社の市川会長から説明を伺い、また協会の顧先生から補足説明を頂き、一同は図書寄贈事業の公益性、厳しさと複雑さを詳細に理解し、図書寄贈業務に対する日本科学協会熱意と職業意識に大いなる敬意を感じた。

午後は国立国会図書館を視察した。同館の紹介映像を見た後、地下書庫と閲覧スペースを見学し、ホールのあらしを把握した。日本が図書保存のための法律に定めたこと、図書館の設計様式、内部管理について、素晴らしいという印象が心に残った。夜は日本科学協会の大島美恵子会長主催の歓迎会があったが、中日双方そして訪日団員同士が気軽な雰囲気の中で親密にふれあうことができた。

2月18日、羽田からから沖縄に移動した。豊見城市の宜保市長を表敬訪問したが、団員たちは同市の暖かさと真心に感動し、同市の順調な発展を喜ばしく思った。

2月19日、午前中は琉球村と首里城を見学し、琉球の歴史と文化を知った。午後はひめゆり平和祈念資料館を見学した。

2月20日、沖縄から京都に移動し、金閣寺と清水寺を見学したが、日本の文化が内包する素

朴さと重々しさを味わった。

2月21日、午前、関西学院大学図書館を訪問した。杉原学長、Martin Collick 副学長博士、奥野図書館館長と主なスタッフが出迎えて対応してくれた。学長より大学の概要、奥野館長より図書館の状況が紹介された。団員たちは図書館の全貌を視察し、とても深く引きつけられた。

昼は大阪城を見学し、その後、同志社大学の図書館を視察した。百合野館長他に出迎えていた。団員たちは興味を持ったことについて討論した。大阪へのバスの中で、団員たちは、図書寄贈に係る業務を更に進めるにはどうすべきか、寄贈図書の効果をよりよく発揮させるにはどうすべきかについて、熱い意見交換をした。夜は、伊藤常務理事主催の歓送会があった。

2月22日、訪日団は関西空港を発ち、それぞれ上海、北京、大連へと向かった。

3. 訪日感想と収穫

(1) 図書寄贈事業の公益性、その努力、厳しさ、細かさ、苦労に感動

寄贈図書を整備する倉庫会社、日本財団などの訪問により、日本科学協会の図書寄贈事業は、純粋に日本の民間組織が中国政府の許可の中で実施しているものであることが理解できた。日本の人々への周知に努め、図書を必要とする中国の学生のため資源を収集し、何回もの選定を行い、リスト作成、中国側と連絡・調整し、仕分けし直し、取りまとめ、梱包・発送・運搬・通関するというプロセスを経て、図書は中国側の中継拠点に送られている。そして、通関手続きを経て、寄贈先の図書館へ届けられるのである。寄贈図書の供給体制には努力と厳しさと細やかさがある。日本経済は不景気であり、しかも、有償で本を買い取るという競合もあり、さらには、経費的な関係から理想的な物流業者が極めて見つかりにくいという状況にあって、日本科学協会の職員たちは非常に苦労しているようだが、成果は顕著であり、寄贈先の館長たちはとても感動している。視察を通じた認識、理解、感動により、寄贈先の館長たちは図書寄贈事業をより深く尊重するようになった。図書寄贈事業により迅速に早くより良く協力することにより、寄贈図書の効果をより良く発揮させたいと考えている。

(2) 日本の図書館は専門的、現代的、効率的、実務的

田中功先生の講話を聴講し、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、国立国会図書館を視察して深く感じたことは、日本の図書館における蔵書体系が非常にシステマチックで厳格であり、保管が完備されていて、しかも掲示や案内のシステムが素晴らしいということである。関西学院大学図書館は、その典型的なケースであろう。閲覧サービス体系は読者中心で、行き届いており非常に周到である。潤沢な費用を投じて現代的な電視図書閲覧システムを構築し、読者の便宜と利用率の向上に資している。形式はとても現代的で、効率は非常に高い。専任司書と外部から派遣された館員によるチームはシンプルであるが、利用者が非常に多いため、投資対効果がとても高い。電子化のレベルとても高い日本にありながら、RFID 図書管理システムが見受けられないのは、日本の図書館業界が流行りに動かされず、実際的な効果を求めており、非常に実務的であることを示している。国会図書館の図書保存の立法は、日本社会がその領域内において人類文明の記載を体系的に保存するために確立された保証制度であり、敬服の念を抱かせる。これらの全てが、中国の館長た

ちに、蔵書、館員、サービス、制度の面に関して素晴らしく深い印象を残している。

(3) 日本の人々の親切、誠実、落ち着き

懇談会の度、中日双方の交流は非常に解け、雰囲気は非常に盛り上がった。道中で助けを求め度、日本の人々は親切にしてくれた。買い物をする度、日本の店員はいつも誠実であった。商品不足を真剣に教えてくれる人までいた。指導層である笹川陽平会長は和やかで親しみやすく、大島会長は優雅で人付き合いが良くて伊藤常務理事はさっぱりした人で、顧文君先生は親切で、厳格で、落ち着きがあり、思い切りがいい人でした。Aさん、Bさん、Cさんなどの職員は真面目にコツコツと、着実に仕事を進め、初日のガイド傅さんは情熱的で、専門的で、周到であった。こうした情熱、穏やかさ、誠実さ、落ち着きのある人徳は、至る所で見られ、例外はほとんどなかった。

(4) 体系的で精緻で安全な日本の社会管理

数日間の訪日であり、深く入り込んだとは言えないが、凡そ感じたことは、日本社会の各システムが厳格に構築されており、しかも厳守されていて、人々が意識的に順守しているということです。さらに、各システムは順調且つ効果的に連携しており、協調していた。このため、社会全体を構成するシステムが精緻、高効率で、信頼性と安全性が保たれているのだ。こうしたことは、飛行機の上から眺めたことから、訪問中に感じたことから、なくしものが何度も戻ってきたことからさえも、証明されている。

(5) 図書寄贈事業と図書館の視察により奮起された献上の精神

日本の図書寄贈事業や図書館業界と直に触れたことにより、日本の同業者の仕事への情熱、専門性の高さや効率性の良さに全ての団員が感動した。また、21日には京都から大阪への車中で、団長である上海海事大学の陳偉炯館長が座長となり、寄贈図書と図書館の機能をよりよく発展させるための討論が行われた。南京大学の羅鈞館長、中国医科大学の郭継軍館長、大連理工大学の劉斌館長、黒龍江東方学院の霍燦如館長などが次々に発言し、議論は白熱し、基本的な意向が形成された。

4. 今後の行動計画

「京都―大阪の車中の討論会」での意向と帰国後のやりとりから、以下のような共通認識が得られた。

日本財団・日本科学協会の図書寄贈の南部地域の中継拠点である上海海事大学が責任者となり、2011年5月下旬に寄贈図書を受けている29館の図書館担当者を招集し、上海浦東新区臨港新城で図書寄贈事業と大学図書館業務のシンポジウムを開催するとともに、寄贈図書受入担当者による交流や研究討論、図書目録作成人員の養成研修と協力を推進する。これにより、図書寄贈事業をより順調で効率の高いものとし、寄贈図書がより大きな力を発揮できるよう促進する。

5. まとめ

訪日期間は短いものであったが、深く印象に残っている。中日両国図書館の協働のもと、図書寄贈事業の業務はより順調で優れたものになる。これらの図書は中国の大学生の日本語や日本知識の学習、科学技術知識の学習、日本文化の理解、感情のやりとりを促進して中日の民間交流を順調なものにし、中日の友好関係発展を促進するといった面で長期的な作用を発揮する。

他山の石－訪日交流で実感したこと－

黒龍江大学図書館館長 趙桂榮



2011年2月15日～22日、日本科学協会の図書寄贈対象大学一つである本大学からの命により、「第五回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加した。期間中、日本財団と日本科学協会が真心あふれる歓迎会を開いてくれた。活動では、日本科学協会が綿密行き届いた手配をしてくれたお陰で、寄贈図書の整備業務の委託先である株式会社倉業サービスを視察することができた。前後して、日本大学法学部図書館、国立国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を見学した。どの図書館へ行っても、大学や図書館の責任者から心のこもった歓迎を受けた。マクロな状況説明を受け、実地視察も行った。このほか、豊見城市の市役所も見学した。また日本女子大学の田中功名誉教授による「日本の大学図書館の現状および最新の動向」という学術報告も聴講した。見学日程はむだなく手配されていた。感銘を受けたことは多く、主に各項目にまとめることができる。

1. 利用者を引きつける個性的な図書館サービス

今回の各図書館見学で最も深く感じたことはこの点である。ネットワーク環境が絶えず改善され、デジタルリソースの利用率が紙の文献に追いつき追い越そうという現在、日本大学法学部図書館では学習コーナー、討論エリア、特別閲覧室などを設けている。こうした取り組みは、疑いなく、図書館が文献と空間の優位性を発掘して光を当て、様々な利用者の学習ニーズを満たすための独創的な行為である。

2. きめ細かな管理による人道的配慮

関西学院大学の図書館では、各フロアにフロア・サービス機能を紹介した無料リーフレットが備え付けてあり、カフェや喫煙室も設けられていた。日本大学法学部の図書館では、図書館ノートパソコンの専用閲覧室を設けているなど、利用者の便宜を図った一連の措置がとられており、細かいところに図書館管理者の良心と苦心が見て取れる。

3. 各種利用者の学習意欲と探求心

国立国会図書館を見学した時、閲覧室には利用者がたくさんいた。視聴覚資料を見ている人、新聞のバックナンバーを読んでいる人、参考書を開いている人もいた。多くの利用者は、見たところ60から70歳くらいのお年寄りで、彼らの学問には終わりが無いという研究の精神に心が震えた。

4. 寄贈図書の整備業務委託先スタッフの仕事熱心さ

寄贈図書の整備業務委託先を訪ねると、同社スタッフが作業場で図書リストと関連図書の記載を真剣に突合している光景にとっても感動した。彼らの厳格な勤務態度に学ぶべきだと思う一方、他方では一冊一冊の寄贈図書の重みを深く感じた。寄贈図書には寄贈者の愛と整備するスタッフの苦労が込められているのだ。

5. 日本科学協会の情熱と周到さ

訪日期间中、日本科学協会の大島美恵子会長が多忙の中、時間を割いて訪日団一行を迎えて下さった。その学者らしい気質と風格は深く印象に残っている。また、顧文君先生は、常に他人に

関心を寄せ、いくつかよい提案をしてくれた。まさに顧先生のような我を忘れて働く人があってこそ、日本財団と日本科学協会の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」が順調に行われているのだと思う。中国大陸の受け入れ図書館として、寄贈された文献をより大事にし、しっかりと保管して幅広く宣伝し、十分に活用していきたい。我が館では現在、日本語文献センターを設けている。主な蔵書は寄贈図書で、頂いた文献に対するオンライン図書目録の作成も始めている。日本語文献データベースの完成に伴って、これらの文献はより大きな利益を発揮してくれるだろうと信じている。

今回の訪日により、日本財団及び日本科学協会、各種図書館に対する理解を深め、相互の友情を増進することができたと同時に、図書館関係の国際交流の強化と促進の基礎が構築されたと思う。

訪日視察で感じたこと

黒龍江東方学院 図書館館長 霍燦如



日本科学協会の招待に応じて、「中国大学図書館担当者訪日団」一行 26 人が、2011 年 2 月 15 日～22 日、訪日交流を行った。

今回の訪問では、中日双方の交流が実際の効果を重視したものであったため、円満な成功が得られた。私は唯一の私学図書館メンバーとして日本の図書館や日本文化などを視察したが、得られたものは多い。今回の交流活動は「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の発展を促すものであった。我が大学が日本科学協会からの寄贈図書をより多く受け入れられるようにするため、相互理解を促進し友情を増進するという強固な基礎を築くことができた。

訪日団は視察交流期間を通して日本財団、日本科学協会の幹部から心のこもったもてなしと親切な配慮を頂いた。日本財団の笹川陽平会長、前田常務理事、日本科学協会の大島美恵子会長が訪日団全員と会見して下さった。表敬訪問の場で笹川会長が指摘されたことによると、1999 年以来、日本側が中国の 28 大学に寄贈した図書は合計 2375, 128 冊で、中国の高等教育事業に多大な貢献をしている。訪日団長である上海海事大学図書館館長の陳偉炯教授が団員を代表して日本財団と日本科学協会の幹部が会見して下さったことに感謝を述べ、また中国 28 大学の図書活用に代わって、中国の大学への教育・科学図書の寄贈に対して感謝を述べた。本学が受け入れた日本の寄贈図書は 124, 153 冊で、28 大学中第 7 位である。

訪日団は 2 月 16 日、日本財団の会議室で日本女子大学の名誉教授(有名な図書館の専門家で、前図書館館長である田中功教授)による「日本の大学図書館の現状および最新の動向」と題する講義を聴講した。この講義では、日本の大学図書館の現状、特に、大学図書館の最新の発展動向について総括が行われていた。中国の大学図書館の発展に対して、大いに啓発効果がある。

訪日団は、国立国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問した。訪日団は各館の紹介を聞き、館内と各業務部門を見学した。全ての見学先で、図書館員との質疑応答や交流を行った。

今回の訪問では、私は任務を持っていた。図書館の建物、内部構造、配置の重点的な視察である。最も感銘が深かった点は、日本の図書館は館内の配置、内装の面で真に人間本位を体現していることで、至る所が読者のために考えてあり、読者はアットホームな感覚で来館できる。図書館の建物は、外観は素朴で品があり特に奇抜な造型ではなかったが、内部は快適なだけではなく一更に尽きることがない楽しみがあって、図書館の機能に新しい変化があった。

読者がアットホームに感じるサービスを提供するため、来館者一人一人に安全保護を提供するため、これらの図書館内には大量のすばらしい芸術品、窓の外には広々とした眺め、中には豊富な蔵書があり、思いつく限りのコーナー全部にハイテク要素が見られた。

天井とその他の室外空間が特色となっている図書館もあった。図書館が読者の休憩専用で廊下を開き、本を読みながら外の庭を觀賞できるようになっていたのだ。休憩、読書用の噴水付きの庭を設けているところもあった。実際のところ、図書館の室内と室外空間の境界は次第にぼやけ

ている。室内に花や草があるのは環境美だけでなく、自然環境保護という生活方式の提唱でもある。

大学図書館は、たいていの民家より快適である。全ての絨毯、天井、庭、そして美しいベランダと芸術家の作品。多くの家庭が図書館の内外装を模倣しようとすらしはじめている――安全で柔軟性があり、派手すぎたり高すぎたりもしない。「世界で全てのすばらしい可能性、心の静かな港湾と緑色の空間」が大学図書館と融合しているのだ。

今回の活動では、日本の大学図書館を視察しただけでなく、中国国内の同業者とも交流を持った。共通して気づいたことは、大学図書館はいずれもデジタル図書館に向けて発展していくということだ。図書館の機能には大きな変化が生じており、図書館で公共学習スペース（learning commons）が勃興する。日本の大学図書館では、各フロアにガラスで仕切られた公共学習スペースがあった。数十人が使える学習討論スペースである。中にはパソコン、視聴覚など何でもそろっており、学生は中で自由に討論できる。高年次の学生が低年次の学生を助けるための公共学習スペースもある。上海交通大学図書館の新館には、このような学習スペースが24箇所ある。利用率は高い。サードプレイスとしての図書館（コーヒーを飲みながらネットを利用したり、喋りながらの公共学習スペース）は雨後の竹の子のように国内外の大学で勃興している。米国では大学図書館を増築しており、学生の実習・習作スペースを図書館に移転したところさえある。デジタル化、ネットワーク化に伴って、図書館のサービス機能にも巨大な変化が生じている。以上が、本学で図書館を新設するにあたりとても参考に値する項目である。最後に、同志社大学図書館の館訓「図書館なくして生命なし（No Library No Live!）」を引いて結びとする。

訪日期间中、病気を押し代表団全員のため心を込めた手配と配慮をくださった顧文君先生に感謝している。おかげで親しみと楽しさがひとしおだった。一生忘れ難い。顧先生、ありがとうございました！

日本訪問の感想

チチハル大学図書館館長 張徳貴



短い8日間の日本の旅で、日本の美しい自然風景を味わい、日本の大都市のモダンな空気を吸った。日本の大学図書館の開放的な管理理念を学び、日本人の仕事熱心さ、厳格さ、効率的な仕事を体験した。私の心に残ったものはあまりにもたくさんあって、いずれも忘れがたい。

日本財団は「世界一家、人類皆兄弟」の理念に基づき、世界の公益事業に尽力している。世界の文明の進歩、人々の友好に巨大な貢献をしており、世界各地の人々から称賛されている。大きな受益国である中国では、日本財団の事業が媒介となり、中国人の日本理解が深まっており、中日両国民の代々の友好の基礎が築かれている。

チチハル市は黒竜江省西北部に位置しており、中国最北部で最大の都市である。国際 SOS 組織が当地に SOS 子ども村を設け、またチチハル大学に格邁那爾職業技術学院を設立して、SOS 子ども村の学生を専門に育成している。もし、日本財団がチチハル市またはチチハル大学に資金援助するプロジェクトを実施したら、より大きな有意義な影響を与えるだろう。

今回の訪日活動により、初めて日本科学協会のスタッフと交流することができた。彼らから学ぶことができたものはとても多い。彼らの熱心、厳格、入念に仕事をする精神は、すばらしい記憶となり一層の輝きを放っている。こうした精神を我が図書館の職員にも共有してもらいたいと思っている。顧文君先生の献身的な働き、綿密な手配、心のこもったサービスにより、予想外の収穫がたくさんあった。先生のことは訪日団が全員一致で賞賛している。日本科学協会のスタッフには、日本人の優れた品格と向上を求める精神を見てとることができた。

日本の大学図書館は、造型の奇抜な建物、機能の整っている配置、オープンな管理のいずれもがよい参考になった。交流場所、研究室、休憩場所には、読者のための個性化したサービスがよく現れていた。衛生的な環境やフルオープンの管理モデルは、日本の読者が良好な素質を持っていると証明しており、この点でも日本国民の教育成果が具体的に現れているのだ。

異国の文化精神と融合・調和して発展的な新図書館を建設

鷗西大学図書館館長 李福貴



日本科学協会の招聘を受け、2月15日から2月22日までの8日間、日本で視察交流活動を行い、幾つかの大学図書館等の発展の状況に重点を置いて視察した。

今回の中国大学図書館担当者訪日団は24大学の26人からなり、団長は上海海事大学の陳偉炯館長が担い、それぞれ北京、上海、大連から飛行機で東京へ向かった。

今回の訪日は、日本科学協会による綿密な手配のもと、私たち訪日団は日本財団及び日本の大学図書館等から温かい対応を受けた。その間、私たちは日本財団の会長と会見し、日本大学法学部図書館、国立国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問した。訪日団全員が日本の大学図書館等の責任者から詳細な説明を真剣に聞き、各図書館で見学と考察を行った。見学後、中日双方が図書事業の発展、図書の貸出しの管理や利用者サービスなどについて意見交換と考察を行った。

今回の視察で感じたことをまとめると、次のとおりである。

1. 日本科学協会の公益性

日本科学協会は1924年に設立され文部大臣の認可を受けた財団法人で、日本屈指の歴史を有する公益法人である。同協会は日本財団の賛助のもと設立され、主に学術界の人々から成る組織である。また、国内外の科学技術に関する業務や機関、新しい科学技術の発展に関連する人々の友好協力の促進に努めており、科学教育と文化事業の各プロジェクトの発展を推進し、世界平和と調和ある発展に貢献している。

日本科学協会の数多い事業の中でも、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」がとても深く印象に残っている。同事業は日本科学協会が1999年7月に開始したもので、図書の寄贈と人的交流を趣旨として広範に広く展開されている国際交流事業で、国際理解の促進、友好の増進に大いに寄与している。日本の企業、大学、研究機関、出版社などの協力を得て、これまでに240万冊の図書が中国の28大学に寄贈されている。

“Helping people care for the world”は日本財団の趣旨を表わす言葉であり、日本財団が公益事業を熱愛していることが反映されている。中日の科学研究を発展させるために傑出した貢献をしており、調和、互助、協力の理念が十分に示されている。

2. 日本の図書館を見学し、新型図書館の建設方法を学んだ

周知のように、日本経済は短期間で発展し、一躍世界の経済大国となった。その要因の一つは、政府が教育を重視したことである。図書館建設は教育の重要な構成要素であり、日本政府は一貫して図書館建設を非常に重視してきた。図書館には3つのレベルがあって、それは国会図書館、大学および研究機関の図書館、地域の市民図書館などである。

日本の大学図書館は更に国立大学図書館、公立大学図書館、私立大学図書館に分かれ、大学図書館は統計によると合計760箇所である。図書館職員のうち専門職員の占める比率は47.52%で、専門職員の有資格者の比率は平均53.9%である。このことから、日本の図書館職員は資質も素質も比較的高い水準にあり、図書館の雰囲気はより文化的なものになっていることが分かる。利

用者は快適な読書環境を享受すると同時に、気楽で喜ばしい雰囲気を感じることができるのだ。

日本では、図書館の対外開放比率が平均で 92.1%にも及ぶ。これは国民の絶対多数が図書館の資源を利用することができ、学術、文化・文明の充実と向上が図られるということを示している。私は、訪日の過程で、この国の国民の素質、人文環境などを感じることができたが、これは図書館の対外開放の状況とある程度関係があるのかもしれない。また、日本の大学で情報リテラシー教育を行っている比率も 93.9%にのぼる。データベースの応用、管理の自動化の需要に対して、定期的に館員研修が行われている。今回、私たちが見学した日本の図書館は非常に特徴的であり、学習すべきところが多々あった。例えば、日本の大学図書館の職員の勤務態度は非常に厳格で、適性能力がありサービス精神が強いということ、閲覧環境と自習環境が優れていること、親切で行き届いた利用者サービスの理念があることなど。

今回の訪日で得られたものは多い。特に日本財団の公益事業の基本理念、各大学の図書館設計の合理性、建設の科学性、管理の文化性などは何れも参考になる。同志社大学には“Learn to live and live to learn”という言葉がある。この理念と方針によって教員や学生、社会人及び外国の友好的パートナーを導いていることは尊敬に値することであり、私たちは学び更に発展させるべきものなのである。私たちは日本科学協会及び日本の大学との友好的な交流を継続し、協力して助け合い、文明的で友好的な世界の大家族を共に建設するのである。

最後に、こうした機会を与えてくれた日本科学協会に感謝したい。お陰で国外の友人と親交を結び、国を跨ぐ文明を学ぶことができた。同時に、日本の皆さんが我が校に見学交流にいらっしゃることを歓迎する。

訪日感想

延辺大学図書館 採編部主任 黄美蘭



2011年2月、日本科学協会の招聘に応じ、「第5回中国大学図書館担当者訪日」の一員として8日間の日本訪問を行った。日程はとても充実しており、実に内容豊富だった。表敬訪問、学術報告の聴講、図書館や史跡の見学以外にも、日常の飲食、宿泊といった手配もかなり精密で、そこからは深く濃厚で独特な日本の文化が感じられた。2月は冬から春への変わり目である。訪日中はずっと日本科学協会の担当者が随行してくれていた。桜の香りを味わうことはできなかったが、日本人の対応の優しさは桜の香りのように清新だった。

海外の大学への図書寄贈は、日本財団の賛助のもと日本科学協会が行っているものであり、国際的な相互理解と友好協力を目的とした事業のひとつである。1999年から同協会が中国の28大学と1研究所に寄贈した図書は合計で約247万冊である。私が務める延辺大学は、1999年から現在までに126,913冊の寄贈を受けてきた。

これらの書籍は本学図書館に収蔵され、本学の教員や学生にとっても歓迎されている。

今のところ日本は不景気で、古本の売買を専門とする商売が益々繁盛している。より多くの図書を収集できるよう、日本科学協会のスタッフが提供元の担当者と面談して提供を依頼し、図書を寄贈する気にさせてくれたことや、更に多くの色々な話を聞いて、図書寄贈事業の各過程をしっかりと理解してみると、日本科学協会のスタッフの熱心さには感動した。心の奥底から熱い波が湧き始め、敬服と感謝の思いが自然と生まれた。日本から寄贈された一冊一冊の図書はずっしりと重いものであり、金銭で買えない貴重な品物である。そこには日本人の中国人に対する友好の心、平和を望む心、共に発展しようという心がこもっているのだ。

専門の関係で、図書館の見学がより深く印象に残っている。前後して三つの私立大学図書館と国立国会図書館を見学した。各館を訪れる度、中国の同業者にはとても温かく周到に対応してもらえた。まるで中国国内の図書館を見学しているかのような感覚だった。

2月は日本の大学の休暇期間である。図書館にはそれほど多くの学生が見られなかったが、職員は持ち場をしっかりと守り、少しもいい加減にせず仕事に専念していた。図書館の全体的な構造設計、書架や閲覧席といった家具の選定と配置、コーナー部分の巧妙な利用、入口にある開館時間表示板など、日本人の弛むことなく改善する姿勢と仕事の入念さ、思いやりが行き届いた人道的配慮の精神が随所に見られた。図書館の電子閲覧室にある座席と座席の間隔は広く、日本は小型、微細型、節約型社会であることが強調されているが、そこには広々として快適な空間が提供されていた。こうした点も、中国との違いだろう。

電子化、情報化、ネットワーク化時代における日本人の読書に対する情熱と執着には感動を覚える。公共の場ならどこでも、人目を気にせず静かに本を読んでいる人が目に入る。日本では科学普及の読物や文学の書籍がちょうどスーツのポケットに入るぐらいの規格で、持ち歩きやすく、取り出して読むのも簡単だ。比べると、中国国内のベストセラーは、小さいものでA5相当、大きいものではA4相当である。専用のバッグを使わないと持ち歩きにくく、どこでも読めるとい

うわけにはいかない。

日本製の電子製品と生活用品はとても中国人に愛用されている。こうした製品は発達した日本の科学技術水準の現れであり、また日本人がずっと生活を愛し、生活を享受するという人生観の表れでもある。

日本視察の期間は短く、表面的にしか見られなかったものが多かったが、感慨は深い。改革開放後の中国で生じた巨大な変化と結びつけ、日本の図書館の昨日は私たちの今日、日本の図書館の今日は私たちの明日だと思う。帰国の道中、私は自らが従事する図書館の仕事にとても誇りと安らぎを感じた。

訪日の印象と感想

吉林大学図書館館長 李書源



2011年2月15日～22日、日本科学協会の招聘に応じ、「第5回中国大学図書館担当者訪日団」の一員として8日間の日本訪問を行った。収穫はとて大きく、感慨も多い。

日本を訪問したのは、今回が初めてである。日本は中国と一衣帯水の隣国で、歴史上も中国とは複雑な恩讐関係がある。また、先進国でもあり、中国と同様、世界経済において重要な位置を占めている。中日関係は世界で最も重要な国家関係の一つと言え、世界の政治構造に通常と異なる影響を及ぼす。中国のインテリについて言えば、最も関心のある国の一位が米国、二位が日本である。そのため、今回の訪日は、自ずと期待に満ちたものであった。

訪日期间中、日本側による手配は非常に充実し、また、可能な限り全面的なものであった。日本の有名な図書館情報学者である田中功先生の学術報告を聴講し、日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の大島会長と会見した。寄贈図書の整備委託会社では、物流倉庫と図書の整備業務を見学し、国立国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問見学した。また、東京、大阪、京都、沖縄の何都市かの有名な歴史的・文化的な景勝地と街並みも見学した。後に真剣に振り返ると、今回の訪日は感謝の旅、学習の旅、交流と理解の旅という3点に総括することができるように思う。

まずは、感謝の旅である。日本財団の創設者である故笹川良一元会長は世界平和事業や中日の友好と文化交流に尽くされたことで高名である。私は、まだ青年教師だった頃、ヤングリーダー奨学基金のお世話になったことがある。日本財団の関係団体である日本科学協会は、長期に亘って中日文化交流活動を推進している。中国の各大学に図書を寄贈し、各種の日本語教育支援事業や日本知識クイズ大会を実施して、日本へ研修に訪れる中国の研究者に助成金を支給するなどし、中国国内で高い知名度を持つ。吉林大学は当初からの図書寄贈対象大学の一つで、協会からの寄贈図書は、吉林大学の蔵書構成の重要な部分を占めている。日本科学協会のスタッフが、多くの困難の中、可能な限り努力して様々なところから探し集め、綿密に手配し、絶えず頑張り続けて中国の大学へ寄贈してくれた図書は、まさに、文化交流の促進、中日友好の増進という善良な目的から出たものであり、真に中日両国民の認識、理解、友好を推し進める行動であることが今回、日本を訪問して具体的に分かった。中国の大学が国外から図書の寄贈を受ける事業は他にもいくつかあるが、これほど長期間継続され、入念で効果が突出しているものは、日本科学協会の図書寄贈事業が最たるものである。よって、日本財団の笹川陽平会長、前田常務理事、日本科学協会の大島会長、伊藤常務理事、及び図書寄贈事業の責任者である顧文君先生、Aさん、Bさん、Cさんに、心から感謝している。こうした着実な民間交流は、ある意味で、両国首脳相互訪問、会談といった正式外交よりも、両国民の理解、意思疎通、友好を容易に実現させるものであると思う。

次は学習の旅ということである。今回の訪日では、タイプが異なる4つの図書館を見学し、日本の図書館の同業者との交流を持った。また、図書館専門家の学術報告を聴講し、発展の構想、

管理システム、サービス理念、資源の構築、サービス方式などに関わらず、日本の図書館は何れも中国の大多数の図書館より進んでいると感じた。例えば、司書資格（図書館員資格）制度は世界の先進的な図書館では採り入れられているものであるが、中国ではまだ普及していない。こうした図書館は一切が読者の観点から出発しており、可能な限り読者の便宜を図った具体的な方法、細かいプロセス上の多くのものが、何れも読者第一主義の理念を具現化しており、学習に値する。見学した日本の図書館では、何れも精細な管理が実現されていた。その図書館の読者サービスと地域・社会に向けたサービスとを結合させ、資源の共有を実現している。自ら閉鎖的になり活動範囲を狭めるといふことはしていない。図書館を管理するチームはいずれも有能で、4階建ての図書館を十人足らずのスタッフがきちんと管理しており、高効率で低コスト、余計な人員や作業がないということも、中国の図書館が努力すべき面である。もちろん、こうした図書館の十分な経費、先進的な施設には、日本の政府や教育機関が図書館事業を重視していることがとてもよく現れている。この点は中国の各級政府、各教育機関にもっと見習ってほしい。

そして、交流と理解の旅である。隠すまでもなく、中日両国間には日本が近代において2度中国を侵略したことということがあり、恨みが蓄積されている。こうした恨みが、現実の地縁政治、米中関係、朝鮮半島情勢そして中国の急速な発展と混ざり合ってしまったため、今の中日関係は決して理想的とも調和が取れているとも言えない。その中には、当然、双方の政治理念、利益の違いといった原因もあるが、双方、特に一般大衆が互いに理解を欠いており、交流不足によって生じた偏見が災いしていることも否定できない。理念の違いは違いとすることができる。歳月の流れが理念を変えるかもしれない。利益の違いも、中日社会の新たな発展により変化し、少なくとも違いを認めようとすることはでき得る。それには時間がかかるが、偏見と誤解は交流を通じて理解を増進すれば是正できるのだ。この面において、日本の民間団体はたくさんの実践的な働きをしている。そうした働きは、疑いなく中日民間交流の面でとてもよい作用を果たしている。この面で、今回の訪日を感じたことも深い。言葉の問題で、多くの方は日本の人々と直接の交流ができなかったし、滞在期間も短かったが、その限られた理解の中でも、日本の人々が友好的で、中日友好を望んでいることを深く感じることはできた。そして、より明確に日本社会の長所を認識することができたのだ。故笹川良一元会長の提唱された「世界一家」の理念にはとても感動した。笹川陽平会長は元会長からの伝統を受け継がれ、中日民間交流、文化交流を新しい段階に押し進めたことから、より一層の賞賛を受けている。いくつかの都市では心のこもった歓迎を受けた。沖縄では、豊見城市の市長がわざわざ歓迎式典を催し、孔子の「朋有り遠方より来たる、また楽しからずや」の横断幕を出して、沖縄の概要を紹介してくれた。また、帰国後に沖縄を紹介してほしいと、沖縄の特徴を持った贈り物をくださった。私たちが触れ合った日本の人々は、私たちの対応を担当する日本科学協会のスタッフ、図書館の同業者、ホテルやレストランのサービススタッフ、商店の販売員であるが、誰もがとても礼儀正しく、親切で、仕事の効率が良く、中日友好を希望していた。日本の街は、東京のような大都会から那覇のような小さな街まで、いずれもきちんとしており治安がよかった。沖縄の空港で、一行のある女性がパスポートなどの身分証明書全部とクレジットカード、現金が入った鞆をお手洗いで紛失してしまった。迎へのバスに

乗ってから気づき、戻っても見つけられなかったが、焦っていた時に空港警察から電話があり、鞆は無事に警察へ届けられたと聞いた。一同もとても感慨を覚えた。これらの都市は車が多いものの、歩行者と自動車が全て交通規則を遵守しており、基本的に渋滞はなかった。ホテルでは施設が完備されておりきめ細やかで、スタッフは仕事熱心で厳格で、日本人の就業態度が現れていた。総括すると、訪日団員全員が日本社会に対してとても良い印象を持った。いわゆる見たものは確実というやつで、こうして知ることができた印象は、真実のものであり、印象深いものなのである。中日の人々のそうした印象の中で中日友好を築いてこそ、確固たる友好が可能なのである。

より多くの中日民間交流の推進により、中日友好事業が発展し、両国民の平和、経済発展、社会福祉に貢献しますように。

日本視察の印象と感想

長春師範学院図書館副館長 劉立強



訪日した8日間は短かったが、日本社会の文化の息づかい、ヒューマニズム、優れた伝統などがとても深く印象に残った。

1. 日本は礼儀の国で、礼儀の重視が日本の調和を促進している

日本人はとても礼儀作法にうるさく、私達からするととても細々としていて煩わしいが、日本人からすると、普通のこととして互いに会釈し、名刺を交換し、「すみません」や「よろしく願います」を交わして客人を送迎する場面などがあり、これらはいずれも日本人の社会生活におけるひとつの縮図である。

2. 日本人は秩序を遵守し、時間を厳守する

日本人の重んじる秩序は社会生活に不可欠なものである。例えば、乗車待ち、買い物、見学などでいずれも並ばなければならず、順序があった。日本の車両は多く、道路は狭いが、交通はスムーズで渋滞があまり見られなかった。日本人は日程の手配、見学や訪問の行程に対して時間配分を厳守し、決して遅刻しない。

3. 日本人は仕事が細かく、全ての細部とプロセスを重視する

日本の図書館は、建物の施工から内装、ヒューマナイズされた設計に至るまで、日本人の真剣さ、入念さ、少しも手を抜かない態度を表している。特に、ひとつひとつのごく細かな部分を重視していることが、きめこまかな美しさを生み出している。図書寄贈事業は公益事業であるが、その取り組みの真摯さ、熱意、詳細さ、各過程の重視によって、より完璧なものとなっている。

4. 日本人は実用性と環境保護を重視する

日本の自動車産業が発達していることは世界中が認めるところであるが、日本の路上を歩き交う自動車は決して豪華な車種ではない。いずれも排気量が小さい(1.0前後の)乗用車で、排気量が大きいベンツ、BMW やジープなどは殆ど見られない。これは日本人が買えないからではなく、実用性と環境保護を重視しているからである。

視察を通じて、日本の経済発展と日本人の高度な文明にどうしても感慨を覚えた。

日本で参加した学術交流の総括

中国医科大学図書館館長 郭継軍



日本科学協会、日本財団の招聘に応じ、中国の28大学図書館館長等からなる「第五回中国大学図書館担当者交流」プログラムが2011年2月15日～2月22日の日程で実施された。交流期間中には、日本科学協会、日本財団、そして日本の図書館職員と広範な学術文化交流を展開した。そして、国立国会図書館、同志社大学図書館、関西学院大学の図書館などを見学し、図書館職員と図書館の専門分野に関する意見交換を行い、大学図書館のサービスと現代技術の応用などについて理解を深め、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の効果的な展開を促進することができた。沖縄への訪問を通じ、日本文化の多様性について理解を深め、日本人の親切さを感じた。

1. 日本女子大学の田中功名誉教授による講義『日本の大学図書館の現状と最新の動向』(図1)では、日本の大学図書館の数、学生数、職員数とその資格認定、図書館利用の開放、情報リテラシー教育、図書館の発展などについて詳しく述べられていた。交流を通じて、日本の大学図書館の発展の現状と、第三の学習場所として図書館が学生の情報リテラシー養成において巨大な力を持つことなど、本学図書館のサービスと発展を促進するにあたってとてもよい啓示となった。
2. 図書館見学及び図書館職員との交流を通じて、日本の大学図書館の運営とサービス提供の具体的な状況を理解した。例えば、国立国会図書館は全面オープン、大学図書館の開架図書貸し出し、読書専用室の開設などは参考に値する。大学図書館内に教員の推薦図書目録を設置し、各種注意書きを掲示し、図書館のホームページを充実させ、電子リソースのサービスを強化するといった取り組みは、いずれも利用者を中心としたものであり、全て利用者のニーズを出発点とした図書館サービスの精神である。
3. 日本人の同業者との付き合いの中で日本人の中国人に対する情誼を深く体得した。関西学院の図書館を見学した際、関西学院大学の杉原左右一学長がずっと同行し、同大学と図書館の現状を紹介してくれた。中国の大学との交流に関して学長は、より多くの中国の大学と学術交流を展開したいという願望に言及していた。特に、沖縄訪問中、豊見城市の市長から心のこもったもてなしを受け、沖縄の発展、特色文化および中日文化交流の状況を理解したことは、中日文化交流の促進に重要な影響がある。
4. 寄贈図書を整備・配送する倉庫会社の見学を通じて、図書の寄贈作業の具体的な流れを知り、日本科学協会の従業員その他関係者の苦勞、精一杯の調整と注いだ心血を感じたことで、中国国内での寄贈図書受け入れ業務効率は引き上げられるはずである。
5. 今回の文化交流のために日本財団、日本科学協会、そして日本の各大学がなされた努力に感謝する。

寄贈図書受け入れ業務の主な責任者、図書館職員として、今回の事業による学習を通じ、図書館における現代技術の応用状況、図書館設備の利用、読者サービス方式の進展を理解したこと、日本語図書の発行状況と図書寄贈事業の展開状況を知ったことにより、日本語文献の処理が速まり、寄贈図書受け入れ過程の短縮に関する理解が進んだ。中日文化交流、図書有効活用事業のためにより多くの仕事ができると信じている。

心で日本を感じて

大連外国語学院 図書館館長 劉日昇



2011年2月15日～2月22日、日本科学学会の招待に応じて、「教育・研究図書有効活用」第五回中国大学図書館担当者訪日代表団に参加した。今回の訪日活動では、日本科学協会と日本財団の手配により、相前後して日本財団の笹川陽平会長と日本科学協会の大島美恵子会長を訪問した。日本女子大学の田中功名誉教授より『日本の大学図書館の現状と最新の動向』について報告を伺い、日本大学法学部図書館、国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、ひめゆり平和祈念資料館を訪問した。寄贈図書の整備委託先である倉庫サービス株式会社、浅草寺、琉球村、首里城、金閣寺、清水寺、大阪城などを見学し、予定の任務を円満に完了した。

訪日期间中、日本科学協会と日本財団には優れた対応と心のこもった手配を頂き、日本科学協会と日本財団の苦心のほどを切に感じた。日本人の中国人に対する真心を、心で感じる事ができた。八日間の異国の旅は素晴らしく忘れがたいものだった。そこで出会った人、経験したこと、目にした風景、そしてこの旅で人生について心を打たれたことと悟ったことはずっと忘れない。

1. 日本科学協会について

大島美恵子女史を会長とする日本科学協会は、科学に従事する人が相互に協力することを促進し、科学の知識を普及させることで、国や人に貢献することを務めとし、日本国内の科学関係60数名を招集して理事と評議員とし、長期にわたり科学知識の普及活動に従事している。1999年より、無償で図書を寄贈することにより、国際間の相互理解と友好協力を増進する目的で、「教育・研究図書有効活用」事業を始めた。現在、同事業では中国の28大学と1研究機関に集中して寄贈を行っている。これまでに寄贈された日本語および西洋言語の図書は約240万冊で、うち大連外国語学院が受け入れた寄贈図書は293,677冊である。これらの図書は本学図書館の日本語蔵書をきわめて豊かなものにしてくれた。本学の教員と学生が最大の受益者である。

将来中日の友好を担う若い世代の日本語人材によりよく日本を理解させ、日本語学習の積極性を高めるため、図書寄贈事業の一環として、2004年に第一回笹川杯日本知識クイズ大会が行われ、これまでに5回が開催されている。同時に、笹川杯日本知識クイズ大会の優勝者を日本訪問に招待し、訪問、見学、日本人家庭でのホームステイ、日本の大学生との意見交換や自由交流といったさまざまな形式の活動を通して、複数の角度から日本への理解を深めさせ、友好交流を促進するという事業も行っている。

中国の大学図書館担当者が複数の角度から日本への理解を深め、中日間で学術交流を行うことを促進するため、寄贈図書を受け入れている大学の図書館担当者を対象に、2001年からこの訪日交流事業が始まった。日本の図書館および歴史、文化施設の見学、視察、図書館従業員との情報交換といった各種活動が展開されている。

今回の訪日交流活動は第五回にあたる。私は幸い第二回にも参加することができたが、今回のほうが収穫は多く、感動もより大きい。

2. 日本財団について

笹川陽平会長は遠大な見識の政治家で、才能を秘めた企業家であり、更に愛の心に富んだ人道主義の慈善家である。人柄は気さくで、中国に対して友好的。その信念は固く、行いは果敢で、企業家の知恵を使って慈善事業を発展させている。人類の基本的な需要を満足させることに力を尽くすコスモポリタンである。笹川陽平会長が普段好んで使うよく言葉は「世界一家、人類皆兄弟」と「一つの実際の行動は千言万語に勝る」の二つである。世界で大多数の善意の人と異なり、笹川会長はこうした崇高な感情を、自身の努力を通して、高尚ではあるが手の届く実際の行動に転換させている。

過去 45 年で、日本財団とその関連財団は大量の資金援助事業を展開してきた。日本財団の事業は海洋から地球上の大部分へと拡大され、地球上でほぼ全ての人が居住する場所でその成果を見ることができる。現在、日本財団の会長である笹川陽平会長は中国に対する資金援助事業にとっても熱心で、何度も中国を訪問し、訪中時はほぼ毎回、党や国の指導者に接見を受けている。

笹川陽平会長は多忙の中で時間を割いて我々を迎えて、皆が興味を感じる話題について交流や討論を行い、質問に答えてくれた。その後、皆と一人一人の記念撮影を行った。

3. 日本社会について

見学、訪問、観光、買い物、宿泊、食事など、いつでもどこでも、日本社会の高度な発達をはっきりと感ずることができ、日本に対する理解を進めることができた。中国と日本には物質的ひらきもあるが、より多く目にしたのは、思想、意識、道徳、精神といったソフト面でのひらきだった。

日本は先進国であり、世界最大の工業国の一つである。日本の工業製品は性能が優れており、海外市場でもよく売れている。おなじみソニー、東芝、パナソニック、ホンダ、トヨタなどの世界で知られたブランドは、日本経済の発達を最もよく表したものである。日本人は豊富な賃金と社会福利を受けることができる。日本人は妊娠時から栄養食品が発給され、小学校から中学校までは学費がかからない。高校の費用は平均賃金一ヶ月分に相当し、しかも幼稚園から大学まで、学費はいずれも減免が申請できる。教育は基礎であり根本である。日本は早い時期に 100%の小学校、中学校教育を達成した。大学全体の入学率は 40.3%、大学教育を受けた人数が総人口に占める比率は 48%にも達し、成人の識字率は 100%近い。強烈な社会責任、ごみはすべての家庭、すべての人と密接な関係にある。日本は高齢社会であるが、三分の一近い高齢者は 60 歳の定年後も仕事を続ける。彼らはより稼ぐためでなく、社会責任を尽くすためそうするのだ。精密で発達した社会管理が見られ、多くの博物館、図書館、体育館などの公共の施設は無料である。日本のホテルにある電磁マグカップは二カップ分の水しか入らず、しかも連続加熱はできないように設計されている。一杯の水が自然に冷めるのにかかる時間が空いているのだ。トイレトペーパーは全て水に溶ける。高速道路の料金所には自動精算機が設けられ、料金の受け取りに人手が要らない。自動車が通過する際に自動で徴収できるのだ。高速道路は水を通せる構造で、高層ビルの窓にはいずれも非常時の避難口がはっきりと表示されている。国民の安全意識は小さいうちから養われる。日本は自動車保有量大国であるが、日本の実際の交通状況は中国よりずっとよい。洗

滞に遭っても多くは移動が遅くなるだけで、全く動けなくなることはあまりない。主な原因は、誰もがまじめに車間距離を保ち、自覚を持って運転し、譲り合いをするためである。街の様子はきちんとしており、大通りや路地は非常に清潔である。風景が美しく、空気は清新で、鳥のさえずりと花の香りがある。

4. 日本国民について

日本国民は礼儀正しく、親切、誠実、友好的だが、より深く感じたのは素養の高さである。訓練が行き届いており、通訳、職員、運転手、ホテルスタッフのいずれも仕事熱心で、全ての細部に周到な考慮がしてあり、ふるまいにも業務に対する熱意が現れている。

日本科学協会の顧先生をはじめとするチームを例にすると、今回の中国訪日団人員の構成は複雑で、大学図書館の館長、科学研究機構の責任者、新聞社の責任者、雑誌社の責任者および中国各地からの受賞した学生の合計 40 数人である。顧先生チームが、受け入れ計画から行き、日程の手配、航空券の購入、宿泊先と食事場所の選定といった繁雑でこまごまとしたことに手を入れ、全ての細部に配慮をしてくれた。顧先生は長期にわたり働きすぎた疲れのため体調を崩し、短期入院していたが、疲れをおして訪日団に顔を出してくれた。A さん、B さんが全行程で付き添ってくれたこと、伊藤隆常務理事の出迎えと遠路はるばるの歓送も、訪日団にすばらしい印象を残した。更に、沖縄県豊見城市を訪問した際、同市の宜保晴毅市長が自ら歓迎に出向き、当地の特産品をくれた。その上、「遠方より朋来たる、また楽しからずや」の横断幕を出してくれたことで、訪日団の誰もがアットホームな気分になった。また、我々が訪れた各所で、大学の学長、図書館の館長、寄贈図書の整理委託先である倉庫サービス会社の会長、および出迎えてくれた皆さんから暖かい歓迎を受けた。別れの挨拶をするたび、とても感動した。

五、日本の図書館を感じたこと

今回の行程では、日本大学法学部図書館、国立国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、ひめゆり平和祈念資料館を訪問した。見学した図書館のタイプには違うところもあったが、各館いずれも特色が鮮明だった。

国立国会図書館は 1948 年 2 月に設立され、国会に所属している。日本の国家図書館であり、国内最大の公共図書館でもある。同館の蔵書は豊富で、主に立憲政治資料、法令、議会資料、科学技術資料、地図資料、音楽資料、古典図書とアジア資料などを収集している。同館は中央館、国会分館、支部上野図書館、支部東洋文庫および行政、司法各部門の 35 支部図書館から構成されており、現有職員は 800 名あまりである。国立国会図書館は唯一の法で定められた納本図書館である。同館が収集する国内出版物は日本の文化遺産として永久的に保存されるため、保存図書館の機能も帯びている。情報化社会における国の文献情報センターとして、国内外各方面からの求めに応じ、速やかで正確なサービスを提供している。作業人員は国会職員である。国立国会図書館の経費は、国会両院、委員会および議員の需要を満たす前提において全て国が支払う。収集した資料は行政、司法の各部門と一般の読者に向け使用に供している。

日本大学は日本の私立大学の一つで、日本最大の総合大学であり、企業経営者の輩出数が最も多い大学でもある。日本大学には 14 の学部（中国の学系に相当）、大学院（中国の研究院に相当）

と 29 の研究科、7 の付属医院がある。

関西学院大学は、大阪と神戸の間に位置する兵庫県西宮市の私立大学である。キリスト教のプロテスタントに属しており、120 年の歴史を持つ私立の名門総合大学である。現在 11 学部があり、2 万名の学生が、大学、大学院、高等部、中等部、初等部で学んでいる。関西学院大学は「関西四大私大」のひとつで、「関関同立」の首位に位置する。実力の十分なブランド私立大学である関西学院は、整った教育研究設備を持っている。また「日本で最も美しい大学」と称えられるキャンパス環境も在校生の自慢である。

京都の中心部に位置する同志社大学には2つのキャンパスがあり、学部や大学院で学ぶ学生は24,000 人を上回る。同志社大学の生誕の地である今出川キャンパスは京都御所の向かいに位置しており、歴史上も建築学上も重要な有名建築物を数多く擁している。京田辺キャンパスの学生は、人口密度が高い日本では得難い優美な教育環境を享受している。広々としたキャンパスは美しい大自然の中にあり、環境は静かで学習に最適である。同志社大学は日本の教育機関から高く評価されている。

この三つの大学図書館には多くの共通点がある。

- ・キャンパスの中心にあり、建物にランドマーク性がある。
- ・内装は重みがあり、上品、シンプル、実用的である。
- ・学長が重視しており、図書館の幹部が専門的で熱心である。
- ・経費が十分で、文献が揃っている。
- ・高度に現代化している。
- ・人員は合理的で専門的である。
- ・人を基本としている。
- ・サービスに深みと幅広さがある。

中日両国は一衣帯水で、悠久の歴史の源を持っており、互いに参考にすべきところは多い。今回の活動を通して、両国民の相互理解と友情がまた促進された。日本科学協会、日本財団に感謝を申し上げます！

訪日随想

遼寧師範大学図書館館長 石玉廷



日本は、よく知っているがよく分からない国の一つである。子供の頃の映画や成長の過程で学んできたことなどから、日本の善悪両面についてある程度は理解していたが、神秘さも感じていた。「弾丸の国」は世界第二位の経済国であり、公式データでは2010年のGDPで中国が初めて日本を超えたというものの、「国土面積が黒竜江省の82%しかない島国で、周囲から孤立していて、資源も乏しい日本がどうして世界の経済大国になったのだろうか？」と心の中はずっと“敬意”と“好奇心”でいっぱいだった。

幸いにも私は日本科学協会の招聘を受け、「第5回中国大学図書館担当者訪日団」として日本を訪問し、文化交流を行う機会を得た。8日間で4都市を經由し、国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問した。また、滞在中には日本財団の笹川陽平会長にお目にかかることができた。皇居の外観、琉球国の遺跡、大阪城、京都の古代建築の一部も見学した。表面をざっと見ただけに過ぎないとはいえ、この隣国について多少は理解できた。

今回、各大学図書館の担当者は合計26人、大連を共に発ったのは遼寧省の6つの大学図書館の同僚7人だった。2011年2月15日、我々はバスで成田空港から東京に向かった。市街地に着いた時点で現地時刻6時過ぎ。空はもう暗く、車窓の外はライトアップされていた。特に感じることもなく、国内でもこの時間帯はこんな景色だと思った。宿泊先にチェックインしてみると、部屋は狭いが物品は清潔できちんと並べられていた。夕食をとったホテルも同様だった。日本のホテルは割と小さいとは聞いていたものの、ここまで小さいとは予想を超えていた。「小さい」というのが日本に対する最初の直感だった。

日本科学協会の顧文君女史（習慣で彼女を顧先生と呼んでいた）は、一行が日本に着く前に毎日の日程の手配を伝えてくれていた。しかし夕食後、顧先生とガイドは二日目の日程や注意事項などの詳細を一行に引き継いだ。それから毎日が同様だった。今度のイベントを準備するため、顧先生と日本科学協会の関連要員は、各種の方法を通じて、私たちが訪日過程で遭遇した問題を協議してくれた。日程から視察場所まで、交流活動から日常の衣食住や言動まで、細部を大変周到に考慮してくれていた。細かさをいとわず、面倒を嫌がらなかったと言える。

日本科学協会が寄贈図書の整備・梱包と発送を委託された会社の見学にも行った。作業部屋に入ると、作業員が無駄なくきちんと働いていた。室内は整然としており、不要品や物が乱雑に積み上げられているといった現象はまるで見られなかった。顧先生と会社の責任者がそこでの作業の流れを紹介してくれた。日本で提供された図書は、日本科学協会が一次審査を行う。さらに、同社の作業員が一冊ずつ細かい審査（本の内容、状態などを含む）、検査、分類、リスト作成（中国の図書館が要望した図書）、押印、梱包を行う。間違いは全く起こらず、仕事の精密さ細かさが見てとれる。実際、自分の目で見えていなければ、信じられなかったことである。

日本人の仕事が非常に真面目できめ細かいということは、昔から聞いていたが、上記の2つのことから、そのことを身に染みて理解することができた、というのが日本に対する2つ目の感覚である。細かいことが成功と失敗を決めるのである。日本は幾重もの苦しみを経て急速に発展し、軽蔑されるはずのない民族となったが、これは彼らの仕事ぶりと関係しているのではないだろうか？

日本に着いて2日目の朝、散歩していて初めて本当に東京の“真相”を目にすることができた。至る所ビルで、大通りは清潔できちんとしており、どの建築物にも塵一つない。行き交う車も洗ったばかりのようにぴかぴかだった。地面には何も落ちておらず、通行人が痰を吐いた痕跡もなかった。その後の数日間で徐々に分かったことだが、繁華街であっても、ごみをポイ捨てする人やその辺に痰を吐く人はいなかった。日本人の喫煙者は少なくないが、皆、自主的に指定の場所で吸い殻の始末をしていた。日本は島国で、典型的な海洋性気候である。雨が多く森林の占める面積は60%にも達する。これらは日本がどこも清潔な原因の一つではあるが、各人の自主的な環境保全意識の方がより重要である。

道路は狭く車両は多いが、自由に走ることができ、整然としている。日本に滞在した数日のうち、東京、沖縄、大阪のどこでも渋滞が起きていたが、割り込みや衝突は見られなかった。歩行者が自発的に横断歩道を渡り、信号を守って車道を横断している様子はさらに秩序のあるものだった。

日本では至る所で“小さい”と感じたが、どこも整然としており、秩序があった。これは自然条件のお陰というより、人為的要素の方が強いと思う。国民の素養の高さが十分に表れているのだ。日本人は何事も“融通が利かず”柔軟性がないと言われるが、その堅さこそが社会全体に秩序を持たせるのである、というのが3つ目の感覚である。

日本にいる数日間で耳にすることが多かったのは「こんにちは」、「ありがとう」、「お手数かけます」、「さようなら」だった。私は日本語が分からないが、出国する前にこれらの語句はよく学んでいたのだから基本的には分かる。この点から、日本は本当に“礼儀の国”であると言うことができる。特に感動したのは、沖縄空港で起きた“驚くべき”出来事である。バスに乗車して出発に備えていたとき、同行していた訪日団員の一人が、持ち歩いていた鞆をお手洗いに忘れてきたことに気づいた。中には現金だけでなく、もっと大事なパスポートが入っているという。出国してパスポートをなくすというのは非常に厄介な事態である。探しに戻っても、きっとない。ガイドが空港に説明と紛失届けに行った。豊見城市の宜保晴毅市長主催の歓迎会に参加する予定だったので、一行は焦っていた。もう待てないし、待っても仕方がないかもしれない。取りあえず歓迎会に参加するしかなかった。しかし、発車して10分もしないうちに顧先生の電話が鳴った。日本科学協会の事務所からの知らせで、鞆は見つかり警察に届けられたので、すぐに取り戻すことができるとのことだった。空港の商業施設のある従業員がお手洗いでその鞆を見つけ、開いてみたのだという。その従業員は中国語が読めなかったが、中の書類に「日

本科学協会」という文字があることに気づき、すぐ日本科学協会へ電話して、鞆を警察に届けたということだった。鞆をなくしたと気づいてから 30 分程しか経っておらず、その速さは“驚くべき”と言えた。宜保市長の歓迎会終了後、空港に鞆を取りに戻ったのだが、そこでまた感動的な出来事があった。日本の法律では、逸失物の 10%を拾得者へ謝礼金として渡すことになっている。しかし、この拾得者は「全く要らない、中国の友人がまた沖縄へ来てくれますよう」とだけ言ったのである。何日も経った今でも、この件には懐かしいものがある。

まさに日本科学協会と日本財団がしっかり手を組んで協力したからこそ、この訪日交流が実現したのである。私は感謝の思いを抱いて飛行機に乗った。この感謝は招聘を受けた日から生まれたものではない。1999 年以降、日本科学協会が日本の関連企業、大学、研究機関、出版社、個人などから関連図書を提供してもらい、海外の大学や研究機関に無償で寄贈し、教育や学術研究に有効利用してもらおうという活動をしていること、また、相互理解の促進と友好の増進に貢献するため、本学図書館を寄贈対象大学の 1 つに選んだということを、私は図書館に勤務するようになってから知った。この事業のために日本科学協会と日本財団は大量のヒト、モノ、カネを費やし、また、これを基礎に事業を「中国大学図書館責任者訪日交流」活動にまで発展させた。私もその受益者である。

中国には「一滴の恩を受けたら、泉を湧かせて報いる」という諺がある。今のところ、私個人の能力は日本人に及ぶものではないが、わずか数日の訪日で見たと、聞いたこと、思ったこと、感じたことを周囲の人へ伝え、日本人の友好を理解してもらい、日本人が“きちんとしていて、秩序があって、真面目で、勤勉で、文化的で、素養が高い”ということを理解してもらおうと思っている。笹川良一先生は「世界一家、人類皆兄弟」と主張されている。私も中日両国民の友情が永遠に残ることを固く信じている。

訪日感想

大連医科大学図書館副館長 劉薇薇



2011年2月15日～22日、「第5回中国大学図書館担当者訪日団」の一員として8日間の日本訪問を行った。日程は非常に詰まっており、内容も実に充実したものであった。日本訪問の前、日本科学協会の顧文君先生から今回の活動に関する各種の書類を受け取った。連絡先一覧、日程表、アンケート用紙、注意事項、訪日団名簿などが含まれており、彼らの仕事に対する真剣さ、細かさ、周到さを深く感じた。今回の訪問を成功させるための確たる基礎が整っていたのである。日本訪問は今回が初めてだった。以前は、人から聞いたり本で見かけたりして、日本人がどれほど仕事熱心で礼儀正しく細かいかなどについて知っただけである。しかし、今回の活動を通して、私自身が本当に日本について理解することができた。以下、今回の活動について感じたことを述べる。

1. 日本の印象

(1) 日本の都市に対する印象

今回の訪日では東京、沖縄、大阪、京都を訪れたが、全体的な印象としては、清潔で整っており、精緻で秩序があるというものだった。東京は地価が高い都市で、人口密度は高いが、通りを行く人の流れも車の流れも落ち着いていて秩序があった。クラクションは殆ど聞かれず、運転者、歩行者ともに交通ルールをしっかりと遵守していた。このため道路交通はスムーズで、渋滞は殆ど見られなかった。通りの両側には至る所に精緻さが見られ、単なる小緑地（小さな盆景なのかもしれないが）も、心や目を楽しませてくれた。人と自然との調和した美しさがよく表れていた。沖縄は美しい島嶼で、東京ほど現代的ではないが、伝統的な自然の美しさがより良く現れており、風景が優れ、帰ることを忘れさせた。大阪は日本の経済や文化における中心都市の一つである。大阪での滞在時間が長くなかったため印象は薄いですが、清潔で整っている感じがした。京都は日本の歴史的な文化都市で、数々の歴史的な文化遺産を擁している。清水寺と金閣寺を散策し、道中では往事の風格が漂う建物を鑑賞した。

(2) 日本の文化に対する印象

今回の訪問では、浅草寺、金閣寺、清水寺、琉球村、首里城、大阪城を見学し、日本の伝統舞踊を鑑賞し、日本の伝統文化や歴史に対する理解と認識を深めることができた。また、ひめゆり平和祈念資料館も見学し、沖縄戦における女学生たちの犠牲の状況を知り、見学後には気持ちがとても重くなった。うら若き100名余りの少女が生命を失ったことに対する哀惜と同時に、戦争に対して極めて強い憎悪を感じたのだ。世界の人々が平和を渴望する気持ちは同じだと思う。中国人だろうと日本人だろうと戦争の被害を受けたのだ。後輩のため、今後の戒めとして、歴史をより確実に心に刻み、世界平和のために努力すべきである。

(3) 日本国民に対する印象

各種活動への参加を通して、日本人と直接触れ合う機会があった。日本人全体としては、真面目で、厳格で、仕事熱心という印象だったが、このことは日本科学協会の顧先生とそのチームが徹底的に体現している。見学、食事、宿泊、交通、見学などの各面において手配が非常に細かく、

一分一秒のずれもなかった。彼らの熱心さも敬服に値するものだった。彼らと交流しているうち、彼らの毎日の勤務時間が特に長いということに気づいた。しかも、残業は進んで行っているのだ。私たちは不可思議だと思ったが、彼らに言わせると、みんな同じようなものだそうである。不景気のため、職場のことを多く考える必要があるというのだが、こうした責任感は実に得難いものである。こうした精神こそまさしく主人公精神というものであり、学ぶに値するのだ。

日本人は謙虚で礼儀正しく、とても友好的でもある。彼らが頻繁におじぎをしているばかりでなく、そもそも、多くの場面において彼らが叫んだり無秩序に群がったりすることはなかった。日本人は謙虚で礼儀正しいのである。時々、彼らの間に摩擦や争いごとがあるなど想像できないと思うことがある。彼らの性格とも関係するのだろうが、彼らの平和な心により強く関係しているのだろう。私たちが接触した日本人は誰もが非常に友好的だった。中国文化を非常によく理解している人や中国がとても好きな人がおり、私たちが中国に遊びに来て欲しいと言うと、とても嬉しそうだった。

日本人はいつも行動がきちんとしていて、細部を重視し、手順を厳格に守る。何かをする前には常に計画を練り、計画に従って厳格に実行する。こうしたやり方の長所は操作性の良さと実行のしやすさであるが、時によっては余りに融通が利かないということもある。日本人は幼いころから他人に迷惑をかけないよう教育されているが、このことも彼らがルールを遵守できる原因の1つである。

(4) 日本の図書館に対する印象

今回の訪問では、日本科学協会が日本女子大学の田中功名誉教授を招き、日本の大学図書館の現状と最新の動向を紹介してくれた。日本の大学図書館の数、学生数、職員数、対外開放状況、職員の専門性、社会向けサービスの状況、公共学習空間の提供、学生のリテラシー教育などについて、全面的に理解することができた。同時に、こちらからの様々な質問に対して詳しく答えてもらうことができた。

今回、主に見学したのは国立国会図書館、日本大学図書館、関西学院図書館、同志社大学図書館である。これらの図書館にはそれぞれ特徴があった。

- ① 国立国会図書館は日本の国家図書館で、悠久の歴史を持ち、蔵書が豊富である。内装は重みがあって上品だが民族性も帯びており、新館の建物が特徴的であった。地上三階、地下十階で、地下の空気を調節するため“光庭”天井が設けられていた。私たちは新館の地下書庫、定期刊行物書庫、読者閲覧エリアを見学した。管理が規範化されており、手法が先進的で、サービス業務も非常に良いと感じた。
- ② 日本大学法学部図書館は、館長から図書館全体の状況について説明を受けた後、二人の職員がそれぞれ見学の案内をしてくれた。同館は現代的な大学図書館で、完全オープン式の管理モデルを採用しており、読者に様々なサービスを提供している。読者は閲覧エリアで学習できるだけでなく、独立した研究室を使用したり、カジュアル閲覧エリア内で他人と学術問題について討議したりすることもできる。また、読者の便宜のため、館内の至る所にはプリンタとコピー機があった。家具や設備の配置にも多くの配慮がなされていると

言える。

- ③ 関西学院大学図書館では、学長、副学長と図書館の職員の方々から温かい歓迎を受けた。学長と図書館館長からそれぞれ挨拶があり、部長が図書館全体の状況を説明し、館内を案内してくれた。ここの図書館も現代的な図書館である。彼らの仕事は入念だと感じた。お薦めの参考書と図書の一覧がとても特徴的で参考になる。図書館の機能別ゾーニングも周到で、公共サービスエリアの他にも、自由閲覧室、レストラン、喫煙室といった施設が設置されており、とても人間味があった。
- ④ 同志社大学図書館では館長と職員の方々が暖かく迎え入れ、図書館全体の状況を説明してくれた。彼らは読者にサービスを提供する時も苦心惨憺していた。限られた条件の中、図書館1階ホールの両側を家具で仕切って独立した空間を作り出していた。彼らが“ラボ”と呼ぶその場所は自由学習スペースに似た機能があって、読者に人気があった。

2. 日本財団と日本科学協会に対する認識

以前は、日本財団についてよく理解してはいなかった。笹川陽平会長が表敬訪問の際に紹介されたことや関連資料を通して、日本財団に対してはほぼ全面的な理解が得られた。日本財団は長期に亘って公益事業に尽力しており、世界100か国余りで資金援助事業を行ってきた。援助対象項目の多さと範囲の広さは敬服に値する。中国で資金援助を受けている事業も数十件に及び、中国国内の大学図書館が図書の寄贈を受ける事業も日本財団の資金援助によるものである。この事業は1999年の開始以来12年も展開されているが、この12年間、日本科学協会の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の図書寄贈を受け入れる大学の数は益々増加している。年を経るごとに寄贈図書の受益者となる教員や学生の数が増えているのである。

日本科学協会の大島会長、伊藤常務理事、顧文君先生と職員たちからも手厚いもてなしを受けた。今回の活動では図書の整備・保管倉庫の見学も企画されていた。図書が寄贈元の機関や個人から収集された後の整理、分類、データ加工、保存、運搬など一連の詳しい過程を知り、一冊の本が日本から中国へ運ばれることがどれほど大変なことかについて、理解を深めることができた。日本科学協会の担当者が勤勉に働き、多くの労力、資金を費やしてようやく実現しているのだ。感動を覚えるばかりでなく、自らの責任を感じた。これらの寄贈図書をもっと大切にして、私たちの読者によく理解し利用してもらわなければ、彼らの気持ちに背いてしまうことになる。

3. 私の収穫

私は、今回の訪問活動に参加できたことをとても光栄に感じている。帰国して改めて活動の全過程を振り返ると、日本科学協会が提供してくれたこの訪日の機会に感謝すると同時に、自身の収穫が非常に多かったということを感じる。

今回の活動を通して、日本の社会、文化、図書館などに対してある程度の認識と理解が得られた。特に、日本人の仕事に向き合う真剣さ、熱心さ、執着心には感心する。これも日本が戦後わずか数十年で復活した原因の一つだろうと思う。この面で私たちは彼らに学ぶべきである。

今回の活動を通して、日本の友人や図書館の同僚とたくさん知り合うことができた。学習と交流を通じて理解を増進し、友情を深めた。多くの先進的な管理の経験を学んだが、こうした経験

は今後の私たちの管理業務において非常に参考になる。収穫は大きい。今後も互いに連絡を取り合い、機会があれば共同事業をしたいと思っている。

また、今回の活動は中国国内の図書館の同僚達が互いに交流し学習する基盤を提供してくれた。新旧の友人が一堂に集まり、互いに交流して高めあえたのだ。

4. 提案事項

- ・各人との交流を容易にし、メールの不着を防ぐため、全ての寄贈対象機関で一つのグループを構築し、通知やメッセージがあればネット上に即時公表し、ミスを回避する。
- ・寄贈図書の実地活動を強化する。蔵書情報にこれらの図書に関する掲示を行い、他方では特集テーマ、推薦図書などの方法で宣伝を行う。活用率を高め、より多くの人にこれらの資源を理解し利用してもらう。
- ・現在の寄贈図書リストはとても便利に利用できるが、選定図書リストの書誌情報がもう少し詳しくなるよう希望する。題名、国際標準図書番号（ISBN/ISSN）、著者、出版社、出版年、ページ数などであるが、その場合、図書選定作業をより迅速化することができる。

以上、総括すると、図書寄贈事業は非常に有意義な活動ということが出来る。私たちの教育研究業務、特に、図書館の資源構築には大きな助けとなっている。従って、この事業が永遠に継続され、より多くの人々が利益を受けられるよう心から希望する。

訪日感想

大連理工大学（北部中継大学）図書館館長 楊海天



2月15日～2月22日、日本科学協会が実施した「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」活動に参加した。

訪問期間中、代表団は日本科学協会の関係責任者を訪問して、日本の大学図書館の現状に関する学術報告を聴き、同協会の寄贈図書業務を見学して、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館、国会図書館を見学した。

こうした交流活動に参加するのは二度目だが、新たに感じ取ったことは少なくない。

1. 四年が経過しているものの、図書寄贈事業の責任者および図書寄贈チームによる訪問団の接遇から、日本財団、日本科学協会の日中文化交流に対する関心が変わっていないということが理解できた。
2. 寄贈図書の整備・保管をしている倉庫業者を見学した。大きくはないが業務は整然としており、中国の大学図書館に向けて発送される図書の一箱一箱を目の当たりにすることができた。寄贈図書の配送を担う日本側の人々の熱心さと一糸乱れぬ勤務態度に再び感動した。
3. 前回と比べ、団員構成は大きく変化したが、団員たちは直ぐにこの集団に溶け込むことができた。日本滞在中、食卓は中国全国津々浦々の館長達が交流する場となった。一部の館長については国内で面識があるという程度だったが、今回の一週間ですべて行動を共にすることにより、個人間の相互理解だけでなく、他大学の図書館についても業務や発展状況を理解することができ、団の解散時には名残惜しくさえ感じられた。団員全てはこの集団を評価しているし、日本科学協会が企画したこの交流の舞台にも深く感謝している。
4. 訪日の機会をいただき、現在の大学図書館発展における主な注目点、経費、資源、利用状況、職員構成、サービスモデルなどに関して日本の図書館担当者と真摯に交流をすることができた。日本の大学図書館のシンプルな職員構成は非常に印象深く心に残っている。恐らく国情が異なるため、国によって大学の図書館に求めるものも異なるのだろう。全体的な印象としては、日本の大学図書館が重点的に注目している問題が北米でのそれと異なるところである。図書資源の効果分析、図書館構造の変化などに対する関心は、北米ほどではなかったようである。

訪問は短かったが、収穫は多かった。最後に、日本科学協会の図書寄贈事業の北方中継拠点である大連理工大学図書館として、また私個人として、中日文化交流の橋を築き、兄弟図書館のためサービスする職責を尽くすべく、力の及ぶ限り努力すると申し上げたい。

訪日感想

大連理工大学図書館副館長 劉斌



2011年2月15日～2月22日、日本科学協会の「第5回中国大学図書館担当者訪日団」に参加してきた。日本を訪れるのは二度目だが、一度目と同様、感じたことや肌で分かったことが沢山あった。

日本財団と日本科学協会の本部を訪ねたのは二度目である。また笹川陽平会長の講話を伺った。会長の提唱される、中日両国国民が互いに知ることによって相互理解と友情を深めるという思想にはとても強く賛同する。2006年に初めて日本を訪れたとき、会長は代表団に対して、たくさん日本を見て日本を知ってほしいと希望された。最初の訪日は深く印象に残っており、中国に帰ってから『日本の歴史 古代から近代まで』という本を読み、日本の歴史と現代をより深く理解した。日本は尊重に値する国であり、中国が学ぶに値するところは多いと思う。今回の訪日でも、笹川会長は引き続き中日両国国民が互いに知ることによって相互理解と友情を深めるという思想を述べられた。今後の両国国民が付き合ううえでの基本原則の一つになるはずだと思う。中日両国はいずれも東アジアの重要な国である。方や最大の途上国、方や東アジア最先端の国であり、両国の協力と友情は世界の福祉のためとなる。中日両国は政治家の知恵を発揮する以外に、国民間で互いに訪問し、知り、理解することがとても重要である。日本財団と日本科学的協会による、中日両国民が互いに付き合うことを促して友情を促進するという趣旨は、中日の友情を促進する上で非常に重要である。

今回の訪日期間中、代表団はひめゆり平和祈念資料館を見学した。百数人の年若い少女が戦没したことに私は深い悲しみと痛惜を感じた。戦争は中国人民に巨大な苦痛をもたらしただけでなく、日本国民にも深刻な災難をもたらしたのだ。ひめゆり平和祈念資料館は戦争に対しての告発であり、日本の軍国主義に対しての告発である。ひめゆり平和祈念資料館の設立された趣旨は平和への祈りであるが、私は中日両国の友好と平和を希望している。

今回の訪日で、日本の交通について濃厚な興味を持った。現在、中国は世界中で最も自動車生産台数の多い国となっている。自動車と交通の緊張関係が中国の都市部で現れてきた。日本は人口の1億3千万人、自動車も6千数万台で、とっくに自動車大国である。しかも日本の道路資源は国土面積のため限られており、中国の道路のような幅広さはない。日本はどのようにして交通問題を解決しているのだろうか？私は交通を研究しているわけではないが、自分の理解と観察を通じ、日本が解決した交通問題は何点か中国の参考にできると思っている。第一に、順調な交通を保障するための厳格な法律があり、車両と歩行者の権利と義務に有効な規定がある。第二に、道路と橋梁の結合により、交通の平面と立体が有機的につながっている。第三に、道路の計画基準がきめ細かく、道路の管理も精密であるため、一定の道路資源が精密管理により最大の効果を発揮している。第四に、駐車が厳格に管理されている。第五に、国民の交通意識が強力で、ルールを守り、それぞれの道を通行している。この五つの面では中国の取り組みが不十分で、日本から努めて学ぶ必要がある。

前回の訪日では実用品をいくつか購入したが、今回は主に日本の陶器を購入した。日本の陶器は産地が多く、種類が豊富で、古風なもの、モダンなもの、素朴なもの、珍しいものがあり、とても芸術的な製品もある。こうした製品を生活に用いれば、明らかに生活の芸術性が強まる。日本の物質的文明が発達した状況における暮らしの中の芸術性と精神性をかすかに体得した。

今回の訪日では、日本科学協会が田中先生を招いて、日本の大学図書館の概況について紹介してくれた。私たちはまた、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館などの大学図書館を訪問し、日本の同業者達から心のこもったもてなしを受けた。これにより、日本の大学図書館についてより踏み込んだ理解ができたのと同時に、日本の同業者との交流をすることもできた。日本の大学図書館の建築、施設などは深く印象に残っている。交流の場は限られていたが、日本の文献情報資源の電子化はまだ進んでいないとかすかに感じた。また文献情報資源の電子化は読者が情報を得るのに最も効果的な方式だと思う。日本の大学図書館は、管理とサービスの面で長年の発展と成熟を経て保守化しつつある。サービス面でより多くの革新を目にすることはできなかった。

今回の訪日では、再び笹川陽平会長、大島美恵子会長、伊藤常務理事にお目にかかれただけでなく、日本財団と日本科学協会の新しい人々と知り合うこともできた。日本財団と日本科学協会の図書寄贈事業に対する支持がこれでまた体感できた。日本財団と日本科学協会の推進している図書寄贈事業は、中国の学生による日本への理解を増進することができ、長い目で見ると中日友好の促進に重要な意義を持っている。中国で図書の寄贈を受ける受益機関の一員として、日本財団と日本科学協会による有意義な事業に心から感謝している。同時に、北部中継拠点の責任者の一人として、この有意義な行いを引き続きしっかりやっていきたい。

最後に、顧文君先生と同僚のAさん、Bさん、Cさんに感謝したい。彼らの努力により、それぞれの業務の順調な進行が保障されているのだ。訪日期間中は彼らが随行し、訪日を順調なものとするために大量の仕事をしてくれた。ありがとうございました。

私を感じたことー訪日のひとこまー

遼寧对外経貿学院図書館館長 栾美晨

日本財団と日本科学協会に対する感謝の思いでいっぱいになりながら、中日の知識交流の使者一顧女史への敬慕の念を胸に、桜の王国と呼ばれる日本の東京へやってきたのは2月15日だった。日本科学協会の招聘による8日間の訪日交流が始まったのである。

この桜の街に足を踏み入れすぐに感じ取ったのは「礼儀の国」の熱意だった。期間中、日本財団の笹川陽平会長に親切な接見を受け、大島美恵子女史、伊藤氏より手厚いもてなしを受けた。顧先生には勤勉な身辺の世話と心のこもった手配をしてもらった、など、深く感動し忘れられない出来事はいくらもたくさんあった。これらは、皆さんの中日の文化知識交流に対する忠誠心なのだろうか。

日本の重厚な歴史文化を訪問見学することにより、日本の文化、歴史、社会発展など多くの面に対して理解を深めることができた。これによって、日本全体の発展と変化について理解したいという思いがより強くなった。その願いを達成する一番の方法が図書であり、日本財団、日本科学協会が図書寄贈活動を展開する意味をさらに深く理解することができた。中日の文化知識交流のために多くの仕事をしているということに、私は魂の奥底で感動した。

日本の大学図書館には「全ては読者のために」というサービスの設定理念、精密な施設設計、専門職員の職業意識があり、我々が関わっている日本語図書をきちんと扱うということへの励みとなった。手軽で素早い利用者の日本語図書利用に関する研究への熱意こそ、日本科学協会からの寄贈図書の力を最大限に発揮させるという願望を実現させるのである。それぞれの図書がそれを必要とする読者と巡り会って、読者の誰もが日本科学協会からの寄贈図書を活用できるよう、図書と読者を結びつけるという目的を実現するため、図書館の力を最大限に発揮し、既存の基礎（2010年に日本科学協会から寄贈された図書は本学の外国語学科の2009年度入学生に専門実習で重要な作用を発揮。具体的には学院図書館ウェブサイトの記事を参照）の上により輝きを放つものにしたいと思う。

寄贈図書を整備・保管している倉庫を訪れ、自らの目で整備・仕分・配送業務の苦勞と図書を収集する大変さを実際に見てきた。これにより、日本財団と日本科学協会に対する敬意がさらに深くなった。同時に、心の奥からは後ろめたさも湧いてきた。ここで理解したことの全てが、決心を促すものばかりであった。日本財団、日本科学協会の弛むことのない無私の貢献に背いてはならない。寄贈図書の受け入れに際して我々がすべきこと、つまり、タイムリーで緊密な意思疎通と協調を図り、日本科学協会と協力することを真摯に実行しなければならない。寄贈図書の整備・配送拠点を全力で支え、配送の各プロセスにマイナスの影響が絶対出ないようにすることが、中日の知識・文化交流の絆ともいえる図書寄贈事業を末永く順調に継続させる要素なのである。

八日間は短いものだったが、中日友好の絆である日本財団、日本科学協会と我々の深く厚い情誼は永久不変に結ばれているのである。日本に滞在した全ての時間、全ての出来事が心を離れず、一生忘れることはできないだろう。笹川陽平会長の遠大な見識、大島美恵子会長、伊藤氏の気高

いもてなし。顧文君先生の仕事熱心さなどには心から感動した。この全てがよく目に浮かび、まるでまだ共にいるかのような気分になる。図書寄贈活動で我々は知り合い、絶えず付き合うことで親近感を感じるようになったし、双方の志により離れがたいものとなっている。図書寄贈事業をきっかけとして、また絆として、中日の知識・文化交流を長く発展させていけば、この事業は、それぞれの国の文化教育事業の発展により大きな力を発揮する。

日本財団及び日本科学協会と中国の大学図書館は、まさに百花園の中で競って咲く二輪の紅い花のようなものであり、我々の今後の事業は蒼天を自由に旋回するウミツバメのようなものである。花が美しさを引き立て合い、ウミツバメが飛ぶ高さを競うように。皆さんには真摯に感謝を申し上げ、心から祝福を申し上げます。中国には気心の知れた友達がまだいることを忘れないでいただきたい。

訪日感想

清華大学図書館副館長 陳傑渝



日本科学協会の温かい招聘に応じ、「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」活動に参加した。日本にいたのはわずか数日だが、日本科学協会の心のこもった手配と入念で細やかな計画のもと、日本に対して深い記憶を残すことができた。

東京では東京タワーの近くに宿泊した。夜にはホテルの玄関で照明のきらめくタワーが見えたが、毎日の日程がとても詰まっていたため、ずっと見に行く時間はなかった。東京を離れる前の夜、ホテルに戻ったときにはもう遅い時間だった。荷物を片付け終わるともう10時だったが、全く眠くなかった。ロビーでたまたま会ったメンバーに「東京タワーを見に行くのかい、歩道橋を二つ渡るだけだよ」と声をかけられた。見たところ彼はもう見てきたらしかったが、話を聞くと遠くないので興味が湧き、カメラを持ってホテルを出た。小雨がぼたぼたと降っており、路上にはたびたび何台か車が見えるだけで、屋間の往来が盛んな眺めは全くなく、たまに何人かあわただしく通り過ぎていった。ホテルから何歩も進まないうち交差点で赤信号にぶつかった。道路の向かい側では一人が黙々と立っている。車も人もいないせいで、赤信号が長く感じられたが、青に変わると彼はすぐさっさと歩いてきた。あわただしく去っていく彼の姿を眺め、思わず私は各交差点の歩行者に注意を向けはじめた。この雨の深夜に、道に誰もいなくても、誰一人として例外なく、意識的に赤で止まり青で進むという交通ルールを守っていたのだ。つい、東京に着いたばかりのときのことを思い出した。15日の昼に到着後、上海、大連からの団員は到着が17時になるというので、それまでの間に成田山新勝寺を見学することになった。車はお寺に近い駐車場に停まり、私たちは細い道に沿って歩いていったが、清潔できちんとした路傍には、精巧で精緻な民家と商店があり、その間には丹念に剪定された緑があった。車の流れは絶えなかった。道中の景色を見回していると、学校帰りの女の子たちが行った。彼女はランドセルを背負っており、広くもない路肩で高々と手を挙げると、行き交っていた車がゆっくりとその前で停車し女の子たちを渡らせたのだ。夜遅く雨の中でも信号を待つ歩行者と、女の子たちに道を譲った運転者のちょっとしたできごとに、日本人の優れた素養を見ることができる。これは小さい頃から全社会が共同で教育してきた結果だ。

日本にいる期間中は日本財団、日本科学協会を表敬訪問し、寄贈図書の整備拠点を見学して、四つの図書館と交流を行った。また名所旧跡、文化的遺跡を遊覧した。これらの活動を通じて、日本財団が中国で展開している数十の事業に対してより深く知ることができた。そして日本財団がこれほど多くの領域で中日友好のために長い間たゆまず努力してきたことと、世界平和への貢献に、敬服を深く感じた。訪日期间中は、至る所で日本人の中国人に対する友好の情を感じることができた。交流中でも「教育・研究図書有効活用プロジェクト」のスタッフがこのためにつぎ込んでいる労苦と職業意識を見ることができた。まさに彼らの努力があつてこそ、図書寄贈事業がここまで精彩を放っているのだ。受け取った寄贈図書は、寄贈者の中国人に対する友好の情、

この事業に関わる日本の皆さんの願いが大いに含まれているのだと感じた。いずれも、私たちが寄贈図書を取扱う業務をより良くすることの励みになる。

今回の訪日活動はわずか数日で、日本に対する認識も表面的なものではあるが、毎日のように中日友好の雰囲気にも染められ、日本人の仕事や生活における環境保護意識、時間の厳守、仕事熱心さ、厳格さ、他人を思いやる精神を常に感じてきた。今回の訪日交流は、忘れ得ないイベントだと思う。

また再び日本へ来ようと思った。

訪日感想

中国社会科学院 近代史研究所 図書館館員 王北紅



私の勤務先は、3年前から日本科学協会の寄贈図書を受け入れている。寄贈図書は印刷が精巧で美しく、保存状態が良いうえに貴重版が少ない。なぜ、無償で私たちにくれるのか分からず、ずっと納得できないものがあった。その疑問を胸に、日本科学協会の招聘に応じて2011年の旧暦正月13日からの日本見学に参加した。

見学日程は非常に詰まっており、応接にいとまがなかった。訪問団として図書館、関連機関、大学を次々見学して回った。急いで団員全員の顔を覚えた。毎日の行程は夜八時過ぎまで手配されており、目では見きれず頭でも考えきれないような感じであった。沖縄の那覇空港で、うっかりお手洗いに鞆を忘れてしまったのだが、一時間後には奇跡的に取り戻すことができた。その時になって初めて、自分が一体何をしに来たのか、何を考え、何を感じているのかを細かく考えるようになった。

初めて訪れた日本は、全てが他の人の形容した通りであった。狭いが整然として清潔な通り、密集していて低い家屋、清新な空気、全てがのどかな春風のように、想像と異なるところはなかった。また、日本人に対しては、真面目で仕事熱心、ルールをよく守る人々だという感じを深くした。同時に、彼らは親切で礼儀正しく、考え方が細やかであるとも感じた。見学先では、どこでも非常に心のこもった対応を受けた。誰もが自身の仕事について詳しく紹介し、意見交換に誠実に応じ、全ての質問に根気よく答えてくれた。見学した複数の図書館では、各種の明確な表示、きちんとした環境、整然としていて分りやすい図書の配架を目にすることができた。

また、各種の利用ガイドやサービスなど、非常にもヒューマナイズされており、職員のほぼ全てが、立ったまま読者にサービスを提供している図書館もあった。日本へ発つ前、日本科学協会の受け入れ担当者から、訪問期間中の様々な注意事項などの情報が各団員に送信されていた。写真撮影ができる場所とできない場所、立ち入りできる場所とできない場所、全てが前もって示されていた。見学時はできる限り読者の邪魔にならないよう私たちを案内しながら、図書館の運用を全面的且つ詳細に説明してくれた。各種の規範が厳格に実行されている様子や、規範と注意事項を丁寧に紹介してくれる様子に、中国国内とは違うという感じを受けた。殆ど全ての日本人が微笑みながら相手をしてくれた。彼らの注意深さと周到さは滞在中を通して見受けられた。あるコンビニの店員は、言葉が通じないなかで道案内をしようと、私を連れてまるまる一区画も歩いてくれた。想像もできなかったことが沢山あって、自分は本当に外の違う世界を実感しているのだと思った。

沖縄では「ひめゆり平和祈念資料館」を見学した。同館は第二次大戦で命を落とした若い女学生を記念して建てられたものである。中国国内では多くの戦争記念館を見学してきたが、これまで戦争の残酷さに直面したくないばかりに、できる限り肝心なところは避けて通ってきた。しかし、同館にはたくさんの日本人が訪れ、きちんと戦争を理解し、若くして消えた命に心から哀悼を捧げていた。戦争に対する認識が、私と彼らとでこうも違うのかと思わず感慨を覚えた。自分

で歩き目にした日本のあれこれを回想すると、分からないことや疑念はまだまだあるが、目の前にいた日本人全員が、様々な角度から彼らの文明、理念、精神をアピールしていた。また、日本科学協会がどうして図書を寄贈してくれたのかも次第に分かってきた。私達、両国は一衣帯水で、歴史上も色々なことがあったが、私達は互いを理解してはおらず、知り合いになってもいない。文化の交流こそが、その全てを変え理解を増進する力を持っているのである。より多くの人々が、共に素晴らしい明日を迎えられるよう望んでいる。

国境を越えた図書寄贈が友好の橋に—迎春の旅で親友の楽章—

上海交通大学図書館 陳進



2011年2月15日から2月22日、日本科学協会の招きを受け、「第5回中国大学図書館担当訪日団」の一員として一週間、日本を訪問し交流する機会を得ることができた。今回の隣国への視察はちょうど早春の頃で寒暖の入り交じる気候だったが、日本財団、日本科学協会、首脳部と同行者には手厚いもてなしを受け、親切に面倒を見ていただき、あたたかさも春の日差しのような暖かさを感じた。そして、日本人の中国に対する友好の情をさらに身に染みて感じたものである。空も中日の友好交流に歓迎の賛歌を与えてくれたのか、予報の悪天候を覆し好天が続いた。

私自身については、学術面で日本と長期的に交流や協力をしてきている。1986年、留学生として日本の小野測器で信号処理と振動分析の専門知識を学んだ。後、東京工業大学で博士課程に進み、幸いにして同大学の客員教授、大阪の都市大学での非常勤講師となり、日本の大学における教育研究業務に触れる機会を得た。日本と深い縁があることは私の運命らしい。中国国内での研究業務でさえ、日本のFUJITEC社などと長期研究プロジェクトに携わっているのだ。日本の同業者と往来するうち、教育を受け互いに学び、互いに理解し協力するといった点だけでなく、私は日本からたくさんの恩恵を受けた。私の成長過程に重要な基礎を構築してもらったのである。

私は、それまでも何度か日本を訪れているが、それは基本的に学術上の交流と協力に限られていた。主に学術と専門分野の観点から、日本の科学技術発展と厳格な研究モデルについては多くのことを理解している。しかし、今回は日本科学協会会長である気品ある大島美恵子女史にお招きいただき、初めて図書館館長として日本の図書館を視察したのである。おのずと全く新しい角度から日本を考察する機会となり、私が出たものは多い。今回の訪日では日本科学協会の伊藤隆常務理事と顧文君女史に心のこもった手配をいただき、日本文化の魅力をより深く感じることができた。日本人の仕事熱心さ、仕事における周到な手配と細やかな思いやりを感じる事ができ、日本科学協会のご厚意と苦心のほどを深く感じた。また、同協会が科学教育及び文化の発展を促進するため、学術および教育の領域で各種活動を行っており、世界平和を維持するため努力し続けて来られたことにも深く敬服している。特に1999年以来、同協会が始めた「教育・研究図書有効活用プロジェクト」では、日本の出版社、企業、大学、研究機関などから幅広く寄贈図書を募り、選定と整備を行い、中国の大学図書館に寄贈している。財団は、殆ど全ての費用を負担している。10余年の発展を経て、2010年7月現在、財団法人日本科学協会が中国の28大学と1研究機関に寄贈した図書は累計で240万冊に達している。当館も幸いにして当初からの寄贈対象大学に選定され、これまで合計7万冊の寄贈を受けた。寄贈を受けた図書は各分野、豊富な学科や領域にわたっており、当大学の教員や学生が日本の科学技術、歴史文化、政治経済、文学芸術、思想哲学、地理社会などを学び研究するための豊かで貴重な資料となっている。これらの図書は当館の蔵書を豊かにしただけでなく、中日両国の文化交流とコミュニケーションに友好の見えない橋を築いている。

今回の視察交流は、日本科学協会が誠心誠意を込めて企画手配したものであるが、相互交流は実質的な効果を非常に重視しており、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の健全な発展を促進するのみならず、相互理解と友好を増進するという目標も達成され、図書館関係者の国際交流を促進するための良好な基礎を構築することができた。まさに日本財団の笹川陽平会長が仰ったとおり、単なる「親日」がよりレベルの深い「知日」に転換できたのである。もっと知り合わなければ、全てを知る友人ではなく、最終的にはその人を深く理解していることにはならない。だから、私も、真の友情こそ長く続き絶えず発展すると固く信じている。

今回の訪問で、日本の大学図書館は全体として整備されているという印象を受けた。日本女子大学の田中功名教授によると、日本の大学図書館は合計760館あり、そのうちの70%は私立大学の図書館ということである。近年は利用者数の減少に伴い、図書館の職員数も少しずつ減少してきた。10年前と比べて1200人ほど減少している。中国の大学図書館との違いは、90%以上の大学図書館で学外要員の活用を認めていることである。また、別の面では、中国と同様、情報リテラシー教育が大学図書館で重要性を増しつつあることである。94%近い日本の図書館で、情報リテラシー教育が全面的に実施されている。同時に、日本の大学図書館は専門図書館員の導入と育成を非常に重視している。図書館員が備えるべき能力、特に電子化ブームについて、優れた情報を提供する能力に対して新たな需要が出てきたのだ。“サードプレイス”としての図書館、つまり“学びを共有する空間”の構築が魅力に満ちた図書館を建設し、図書館を知識の生産場所、想像力の育成場所にするには、新たな発展方向として、当館の発展構想と偶然にも一致している。

交流訪問では、前後して（東京）日本大学法学部図書館、国立国会図書館、（大阪）関西学院大学図書館、（京都）同志社大学図書館を見学した。日本の図書館サービスの優良さが十分に感じられ、日本の同業における「人を基本」とするサービス理念、館員の生産性と勤務態度がより深く印象に残った。中でも特筆に値するのは、国会図書館の理念「真理がわれらを自由にする」というもので、利用者が空間の制限を受けず、来館者と同様のサービスを受けられるように努めており、さらに国内外の各種図書館と密接な協力関係を築き、情報の共有や交換を行っていることである。日本大学法学部図書館が作成している「図書管理用ガイド」、図書館の建物とフロアをカラーで案内したリーフレットは、簡明かつ実用的で、保存しやすく、利用者が図書館を利用するのに便宜を提供している。関西学院大学図書館が作成している「教員の推薦図書」は、ハンドブック形式で推薦図書の基本情報を列記するだけでなく、教員による簡単な紹介も添えられている。内容が非常に実用的で、十分な閲覧指導効果がある。同志社大学図書館の刊行物『書籍館』も非常に特徴的である。紙面は多くないものの、挿絵も文章も内容豊富で面白く、図書館の最新情報とサービスを逐一マンガ形式で表現しており、とても気に入った。日本の大学図書館における機関リポジトリ（Institutional Repository）の建設も広く重視されている。機関リポジトリを通じて教員や学生の研究成果を電子データ方式で保存し、ネットワーク経由で広めており、成果の保存を保障するとともに、学术交流を促進している。四つの図書館を見学した際、専門の職員がどこも非常に少ないことに気づいた。例えば、関西学院大学の図書館は職員がわずか24人で、11の学部にサービスしている。管理する蔵書は145万冊、定期刊行物は6000種余り、視聴

覚資料は50,000点を超える。この他データベース88件と電子刊行物75,000種余りのメンテナンスが必要だ。しかし、図書館全体の業務は整然と行われており、建物は美しく優雅で、館員の印象もみな上品で雅やかで礼儀正しく、さっぱりしていて上品であり、親切でサービスが周到だった。業務効率の高さと熱心な勤務態度は容易に感じ取れる。

すきのない訪問日程の中で、日本科学協会は埼玉県にある寄贈図書の整備作業場の見学も手配してくださった。私達が自ら寄贈図書の貴重さを体験できたのだ！日本国民の心からの友情がこもった一冊一冊の図書、定期刊行物は、収集から整理、分類、加工を経て、最後に箱詰めとなって発送される。どのプロセスにも友愛、待望、祝福の心が満たされていた。これは日本国民の偉大な友情の証である！

日程は緊迫していたものの、日本科学協会の合理的で巧みな手配により、きわめて有意義な文化の实地調査活動が行われた。東京の浅草寺を見学し、豊見城市の宜保晴毅市長と面会して、琉球村と首里城へ行き、ひめゆり平和祈念資料館を見学し、大阪城を見回して、私たちは身近に日本文化の魅力を感じ取ることができた。このほか、特徴ある各種日本料理を味わうこともできた。こうした付加活動により、日本の歴史、文化、風俗、人情などについてより深く理解することができた。

名残を惜しむうちに訪日の最終日を迎えたが、素晴らしい記憶は心に根付いている。今回の日本訪問は、私（団員には冗談で“日本通”と呼ばれていた）という図書館の新人にとって、全く新しい体験だった。多忙な行程で少し旅の疲れも感じたが、収穫はそれ以上に大きかったように思う。この機会をお借りして、心から、特に日本財団、日本科学協会の幹部に感謝したい。特に、顧文君先生の言葉に表れない専門性と心がけ、Aさんの何でも聞き入れてくれた友情、Bさんの親切な付き添い…。私は思わず唐詩を思い出した。「冬が至れば氷霜が別れを恨み、春が来れば花鳥が情のようだ」中日両国民の友好的な善隣関係には、冬が去って春が来るかのようなようである。両国民が絶えず理解と交流を増進し知り合っていけば、自ずと花は開き、実を結ぶ。

中日両国における恒久平和と相互に利益ある発展の維持と促進のため、両国の友好交流促進と協力事業の傑出した貢献に対して、日本財団、日本科学協会に心から感謝する！同様の活動による促進と親睦を通じて、中日両国民がより調和した親友の樂章を奏でられることを信じて！

寄贈圖書の力を発揮 中日両国民の友情を共に築こう

上海海事大学図書館館長助理 王慧



2011年2月15日～22日、8日間の「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」活動が行われ、円満な成功を得た。日本科学協会「教育・研究図書有効活用プロジェクト」で中国南部の中継拠点である上海海事大学図書館の一員として、今回の訪日活動に参加することができた。

活動の日程は詰まっており、合計で4つの図書館を見学した。国立国会図書館、日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館は、4館それぞれに特徴があり、深く印象に残った。

国立国会図書館は日本唯一の国立図書館であり、献本制度がある。献本制度によって国内で出版された図書、定期刊行物、新聞、電子出版物を収集しており、全国の文献を保存するという重要な役割を果たしている。また同館の文献保護業務はとても入念なもので、資料は全て閲覧と複写しかできず、しかも全て図書館職員が行うことになっている。唯一の閉架式図書館なのかもしれない。新旧二棟の図書館は異なる時期に建てられたが、風格は一体化しており、どこも突出した感じはない。鉄筋コンクリート構造のようだが、質素で広々としており品格がある。

日本大学法学部図書館の主な材質はガラスカーテンウォールである。特に印象的だったのは、エレベーターホールの表示がとてもヒューマナイズされていたことである。どこのフロアにいても、フロア表示で他のフロアと明確に区別がつく。このため、利用者はすぐ自分が何階にいるのかを明確に知ることができるのだ。同館の定期刊行物閲覧室にあった椅子も非常に芸術的なデザインだった。職員の作業エリアは利用者数に比べて狭く、利用者にとって最適な学習空間を提供している。

関西学院大学はキャンパス全体で建物が調和していて美しい。同大学は国際社会に広く貢献できる人材の育成に力を尽くしているため、留学生が多い。図書館は関西学院大学のシンボルで、キャンパスの真ん中に建てられている。図書館に入ると目に映るのは、三本の帯状ガイド表示である。フロアの高さと各フロアの資料分布が、三本の帯で明確に示されている。館内において独特な風景をなしているが、利用者は同館の主な蔵書分布状況を一目で知ることができる。同館の各フロアでは避難通路などの標識がいずれも簡潔に掲示されていた。また、図書館の機関誌を発行しており、その内容は充実している。新着図書の展示書架は、一本の柱を取り囲むように配置されているが、書架は低めで、入館ゲート付近に設けられている。同館の定期刊行物書架はとても現代的で実用的であると感じたが、有機ガラスで作られたものに違いない。最新刊が表面に直接陳列されていて、書架をスライドさせると内側にはバックナンバーが保管されている。有機ガラスを通してバックナンバーの状況をはっきりと見ることができる。同館は、主に米国の大学図書館様式を参照したもので、その風格が色濃く漂っている。同大学学長が見学のほぼ全行程に同行してくれた。同業者を重視してくれているというだけでなく、より多くの中国の大学との学術交流や友好関係を発展させたいという素晴らしい願望が十分に窺われた。

同志社大学のキャンパスは建物がレンガ色でほぼ統一されているが、図書館だけは違っている。

キャンパスの真ん中に位置しながら、校門をくぐるとすぐ目に入ってくる。同館は関西学院大学図書館に比べると少し小規模であるが、狭いながらも類似した新着図書の展示、教員推薦図書、図書館機関誌の発行などのサービスを提供している。総合カウンターが設けられていて、1階にあるということではないが、2階の分かりやすく開放的な中心部分にあり、各閲覧室とは向かい合っている形である。個人的にはこの位置関係が空いているように感じられた。3階から見下ろすと、カウンターの状況が一目瞭然である。館内の各フロアの閲覧室はいずれも書庫と一体化しているが、エリアの異なる蔵書を区別するため、図書はエリアごとに色分けされている。利用者が本を探しやすいよう、館員が図書を並べるのにも便利である。

図書館の正門の入口の壁には“Learn to live , and live to learn”と刻まれた彫刻が掲げられている。恐らくこれが同館開設の趣旨なのだろう。

4つの図書館をひとり見学してみて、恐らくこれらは日本の図書館界を代表するものだろうと感じた。日本の図書館をも代表しているはずである。特に、大学図書館の現状を代表しているのである。各館では可能な限り館内の面積を利用し、書架をほぼ満杯の状態にしている。書架の間、閲覧席の間には、利用者のための広い通路や明るく快適な環境を提供している。特に、各館の表示、案内板はとても入念に作られており、明確且つ特徴的であった。絨毯まで案内板となっているところさえあった。これなら、利用者は入館して直ぐに必要なものを見つけることができる。この点は学習に値するものの一つだと思う。

図書館見学の他に、日本の地理や景色、文化を知ること、今回の訪問活動に含まれていた。日本は海に浮かぶ島のため、四方が海に面している。また、民族の発展の歴史は、人文の景観、風土と人情の上でも民族の特徴が見られる。私たちが見学した浅草寺、金閣寺、清水寺にもそれぞれ発展の歴史がある。浅草寺の門前には、思わず足を止めたくくなるような軽食、アクセサリ、土産物などの小さな店がひしめいており、どれも精巧に作られていた。全身に金色の上着を纏っているかのような金閣寺は遠目に見ることしかできないが、その独特の黄金の輝きは、当時この寺を建立した人が如何に黄金を好んでいたかを明示している。この寺は、アニメ休さんで中国人にも知られている。当時、明朝との貿易が比較的多く、当時の文化の発展に一定の貢献があった。清水寺は金閣寺よりも以前に建てられたものであるが、この寺の慈恩大師は、唐僧の日本における最初の弟子だと伝えられている。ガイドと離れてしまったため、この寺の歴史をそれほど具体的に知ることはできなかったが、中に安置されていたあの禅杖は、当時の唐僧が修行の時に持っていた禅杖を模倣したものではないだろうか。この完全なる木造寺院の総面積は13万平米に達する。中でも最も有名な“清水の舞台”は、50メートルの高さを139本の木の柱で支える構造であり、当時の工事が壮大なもので、非常に困難だったことが分かる。清水寺を見学する時、階段を伝って上っていき、手すりにもたれて眺めると、京都市の風景を一望することができる。

皇居、大阪城はいずれも賑やかな大都市にある、堀と堀に囲まれた古城である。大阪城は何度も戦火や雷で破壊されたが、この歴史的な価値を持つ城を保存するため、1931年に日本の民間が資金を集めて、天守閣を再建した。外観は5層だが内部には8層あり、7層以下は資料館、8層は展望台となっている。大阪城の城壁は堀に囲まれており、近くには景色の美しい庭園と楼閣

がある。城内には百株にのぼる桜の木があり、ここは日本人の花見や行楽の最適地となっている。再建を経ているとは言え、当時この城を建設した時に費やされた労力、工事の壮大さは想像できる。東京にある皇居も、全体が堀に囲まれている。大部分が分厚い石壁、古い樹木や江戸時代の堀に隠されており、本当に遠景しか見ることができない。

沖縄にある琉球村は、この地域特有の民俗文化を保存するために建てられた人文的景観である。古代琉球をテーマとした、沖縄の古い文化を体験できるテーマパークである。村内には名高い琉球列島の伝統建築物が保存されており、当時の琉球の人々の暮らしと琉球の文化が生き生きと再現されている。園内では昔の琉球文化をテーマとするパフォーマンスがちょうど行われているところで、キャストたちが生き生きとしたパフォーマンスを見せていた。特に、琉球人が縁起物と尊ぶ獅子を演じる二人、よく響くラッパ、鼓による優美な楽曲、歌っているキャスト達には、観客から拍手が送られていた。

かつての琉球王国の都の遺跡である首里城は沖縄諸島の重要な古跡で、戦後に残った原型を見本に複製された、唐の風格を持つ建物である。国王が当時の国務を行い、使節と接見し、重要な祝典を催した場所で、中国、日本、沖縄の建築の特徴が融合したものであるが、四度も破壊に遭った。首里城の守礼門は沖縄の象徴と言われている。守礼門は1528年に着工され、屋根の中程には「守礼之邦」と記された額が飾られている。これは「琉球は礼儀の国」という意味であり、琉球王国の精神、文明、風格を表している。これが守礼門の名の由来である。ここから当時の日本本土、中国、朝鮮半島と貿易を行っていた琉球王朝の国際性を垣間見ることができる。

日本科学協会は、上記の図書館や観光地の見学の他、寄贈図書 of 整備を委託している会社の見学も手配してくれた。中国の図書寄贈対象先の図書館館長たちは、図書が日本で収集されてから梱包され中国へ出荷されるまでのプロセス全体について理解を進めることができた。私たちが手に取るものは新刊図書ではないかもしれないし、完全には各大学の専攻と特に関係する書籍でもないかもしれない。ただ、中国の学生に日本の発展の現状、風土や人情、特に日本語の学習を理解してもらうためには、とても大きな作用がある。日本女子大学の田中功名名誉教授による「日本の大学図書館の現状と最新の動向」を聴講し、また、日本の大学図書館を実地見学したことを基礎として、私たちは日本の大学図書館の建設状況と館員の方々の業務状況について理解を進めることができた。その中には参考になるもの、学ぶべきものがある。

上記の訪問や見学の行程、そして、ここには記していないのも全て、日本科学協会、特に「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の担当者が入念に企画してくれたものである。見学した図書館の手配から最も日本的な観光地まで、何れもこの事業に基づくものであり、しかも、中日両国民の間の民間交流と友情を広く深くするものであると深く感じた。

今回の訪日交流活動を通じ、このプロジェクトの中国南部の中継拠点担当者として、日本科学協会という図書寄贈事業の実施団体と積極的に協力し、関連業務により努力し、各受け入れ大学に確たるサービスを行い、自館が受け入れた寄贈図書がより多くの力を発揮できるよう努めたいと思った。

この場をお借りして、日本財団の笹川陽平会長、前田常務理事、日本科学協会の大島会長、伊

藤常務理事および「教育・研究図書有効活用プロジェクト」責任者の顧文君女史と彼女の同僚である A さん、B さん、C さんに感謝を申し上げます。

私たちが共に努力して、この事業をより完全なものにできるよう心から希望するとともに、私たちの友情が桜の花のように美しく花開くことを祈って。

「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加して感じたこと

南京大学図書館副館長 羅鈞



2011年2月15日～22日、日本財団と日本科学協会の招聘を受け、「中国大学図書館担当者訪日団」の一員として日本科学協会の図書寄贈事業に係る訪日活動に参加してきた。今回の活動では、日本財団および日本科学協会の主な指導者と会見し、日本の関係図書館を見学して図書館業界の専門家、職員と深い交流を行った。また、笹川日中友好基金と日本財団による図書寄贈の関連状況を知り、日本文化の視察なども行った。行く先々で日本の各方面の友人から友好的で心のこもったもてなしを受けたことは、筆舌に尽くしがたいものがあり、述べることのできる感銘は本の少しだけである。

1. 理解の深化

今回の訪日活動で、日本財団とその関連財団による中国への資金援助提供事業全体の状況について理解を進めることができた。「中日両国間の永久平和を守り、相互発展を促進する」という理念に基づき、日本財団の資金援助のもと、笹川日中友好基金を通じて中日両国で関連人材の育成、交流事業、調査研究、会議の開催など多くの事業が行われている。特に、日本科学協会の強力な支持のもと、顧文君先生が心を込めて計画、実施している日本財団の図書寄贈事業と人員交流活動は、とても私たちの助けとなっている。十年来の図書寄贈活動を通じ、中国国内で28大学の図書館が利益を享受している。蔵書が豊かになるだけでなく、読者に日本文化の理解、日本語の学習をしてもらうことができるこの事業は、のちのちまで利益をもたらすよいことであり、絶えず改善して受益面を拡大すべきだと思う。

2. 友情の増進

今回の活動では、日本の各方面の友人から私たちに對する真摯な情誼を実感することができた。顧文君先生は私達が出発する前に何度もメールをくださり、すべての細部について私達の関心を喚起し、日本に到着する前から温かみを感じさせてくれた。訪日期間中、笹川陽平会長がご多忙のなか会見してくださった。図書寄贈のことや中日間で関心を寄せていることについて座談会を持ち、その後は各代表と記念撮影に応じてくださった。大島会長、伊藤常務理事など関連指導者の方が夕食を共にして交流を持ってくださったことも深く印象に残っている。

3. 文明の感受

日本社会の文明がどれほど進んでいるか、それまで報道を通してしか知らなかった。百聞は一見に如かずである。飛行機を降りたそのときから、バスでホテルに向かう道中、管理、街の姿、交通秩序がいずれも規則正しくきちんとしていて、誰もが礼儀正しく、譲り合いをしていることに感銘を受けた。図書館であれ観光地であれ、またホテルや商業施設でも、心のこもった周到的なサービスを感じることができた。特に、ガイドから日本人は拾ったお金をごまかさないと聞いたとき、最初は半信半疑だったが、訪日団内で実際に起こったできごとで納得した。北京のある先生が空港のお手洗いに行ったとき、不注意でハンドバッグをなくしてしまった。パスポート、現金、カメラなどの貴重品が全部その中に入っており、団の全員がやきもきしたが、二十分もしな

いうちに、バッグが見つかったとの連絡が入った。全員が拍手で祝ったあの場面は一生忘れ難い。

4. 職業精神の体験

今回の活動では、計画から手配まで、日本科学協会スタッフの心を尽くして責任を果たす職業精神が感じられた。顧先生、A山さん、Bさんは全行程で随行し、各イベントに参加してくれた。特に顧先生は病気を患い、治療を終えてから引き続き随行してくれたのだ。図書館界の同業者も、心を込めて真剣に対応してくれた。すべての細部に職業精神が現れている。

最後に、今回の活動のため苦勞して下さった日本の皆さんに感謝を申し上げます。

友情の増進、管理の促進—訪日交流の感想—

江南大学図書館副館長 謝翠林



日本財団と日本科学協会の招聘に応じ、大学からの命を受け、2011年2月15日～22日、「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」プログラムに参加した。私にとって初めての出国だった。そして、幸いにも日本財団の笹川会長、日本科学協会の大島会長とお目にかかり、日本女子大学の田中功名誉教授の講演を聴くことができた。日本大学法学部図書館、国立国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問し、日本科学協会が寄贈図書の整備を委託している業者のひとつである倉庫サービス(株)を見学したほか、ひめゆり平和祈念資料館なども見学した。わずか数日間の訪問視察だったが、日本の図書館における一部の現状と最新の動向をある程度理解することができただけでなく、日本科学協会が図書寄贈事業に注いでいる大変な労苦について深く知ることができた。日本財団とその関連財団による中国への資金援助事業について基本的なところを知り、日本人に対する感情と友情が増進された。同時に、自身の今後の業務に対する考えと管理についても、プラス効果が得られた。

私は大学図書館の管理業務に就いて間もないため、図書館の状況について知っていることが少なく、日本科学協会の図書寄贈事業については、なお更によく知らなかった。今回は日本を訪問して関係者から説明を聞く機会があつて、この事業の経緯を知ることができた。また、日本国内の出版社、企業、大学、研究機関、個人から寄贈された図書の整理分類の現場を目にしたことで、日本財団、日本科学協会、そして日本人が公益事業に対する熱意に溢れていること、更に彼らの中国人に対する情誼が深く厚いことを肌で感じる事ができた。感謝の思いと敬服の念が自然と湧き上がり、同時に責任の重大さを深く感じた。当初から寄贈図書を頂いている中国の対象大学図書館を管理している職員の一人として、今後の業務において寄贈図書の力をどのように発揮させ、幅広い教員や学生に寄贈図書からもっと知識を得てもらうか。日本科学協会から寄贈していただいた18.5万冊の書籍をどのように管理、保管するか。幅広い教員や学生に幸福をもたらすこの事業に対して、日本科学協会とどのような協力をするかなど。今回の訪日を通じて、もっと考えなければならないと感じた。より良い措置をとり、業務にもっと新しい風を吹き込むべきだと思う。本学は、日本科学協会が招聘した訪日交流に5回連続で参加者を派遣している。また、相前後して日本財団、日本科学協会、日本の第三者評価機関の視察、評価を受けており、管理や利用の面では既にいくつか優れた手法や経験が蓄積されていると言うべきなのである。バトンを受け継いだ一人として、私はまず以前からの優れた伝統を更に輝かせると同時に宣伝をより強化し、幅広い教員や学生に寄贈図書をもっと知ってもらおうと思っている。私たちの図書館の中から日本語学習ブームを起こすと共に、目録編纂、翻訳、図書資料の電子化といった面で十分な人手を確保し、中日友好を担うこの事業が長続きすることを保障するのだ。

今回の訪日で見学した図書館には学び参考にすべきところが沢山あった。例えば、環境は優美で、暖かく、至る所で教員・学生第一主義が見られたこと。対面指導室、休憩室、コピー室を備えているところもあり、日射しによる図書の損傷を防ぐために紫外線を避けた閲覧室を持っている

るところもあった。省エネ、環境保護、騒音低減などの面で優れた対策を取っているところもあった。日本の大学図書館では、職員が少なく業務効率が高い。情報化、自動化が進んでいる。読者に快適な知識空間を提供していることや、建物に魅力いっぱいの図書館など、いずれも改善の参考に値するものである。

他にも、今回の訪問を通じて、日本の都市が清潔できちんとしており、空気が清新で、社会治安が優れていること、そして、日本人の礼儀正しさ、時間厳守、ルール厳守、仕事に対する厳格さ、製品の精緻さに対する要求、飲食の科学的な手配などの面が極めて深く印象に残った。

最後に、心から日本財団、日本科学協会の親切なもてなしと手配の苦心に感謝し、日本の客人が適当な時期に当館を視察・指導してくださる心から歓迎する。

訪日の感想

寧波大学図書館副館長 趙則玲



整然としていて清潔な環境、盆景による緑化、さっぱりとしていて美味しい食事、頭を下げる礼儀作法、時間を厳守し仕事熱心な精神、精緻で精巧な部屋、軽々しくしゃべったり笑ったりしない容貌、というのがこの8日間の訪日で感じた全体的な印象である。

第一に、日本の整然としていて清潔な環境と盆景による緑化にとても深い感銘を受けた。飛行機の窓から見下ろすと、島全体が青々とした林のようであり、青草の絨毯のようでもあった。完全に地面まで整然と緑色に覆われていた。歩いているのがにぎやかな大通りだろうと、静寂な住宅区だろうと、建物、車、通行人のいずれもが全く汚れていない感じだった。日本にいた八日間で、服の襟に埃がつくこともなく、革靴に塵が付くこともなかった。鼻腔内にも汚れが付かなかった。これは日本国民の良好な環境保護意識と衛生習慣が大いに関係している、国民の素質の高さが表れたものだ。これまで公共の場で環境保護や道徳を宣伝する看板を見ていないのだが、こうした規則はとっくに深く人々の心に染み込んでいるのかもしれない。

第二に、日本料理も深く印象に残っている。飲食は、誰もが毎日付き合わなければならないことである。日本料理は美味しいが、特に色が美しかった。油を使わずさっぱりしていて、本当の健康食品である。作りが精巧で美しく、食器が豪華で、しかも冷菜が主体であった。伝統的な日本食では、魚を食べることが多く、調理法では焼く、煮るといったものが多く、炒めたり揚げたりしたものはやや少なかった。味わいでは濃厚な辛味が用いられることは少なかった。こうすることで栄養の損失が抑えられ、味も損なわれない。最初は刺身を食べる勇気がなかった。お腹を壊すのが心配だったのだ。寧波で他人に煽られて刺身を食べた時に下痢をしたことがある。しかし、みんなが興味津々に刺身を食べているのを見て、非常にそそられ、私も何切れか食べてみた。食べてみなければ、分からなかったことである。食べてみて本当に驚いた。ようやくその美味しさに気づいたのだ。また、清潔なものだったので、食べても何ら問題がなかったのである。刺身は全く生臭さがなく、口当たりも良く美味しく、また食べたいと思わせるものだった。また、日本のご飯はとても美味しかった。柔らかくてとても口に合うものだった。他には、寿司、素麺、たこ焼き、カレーライスなども食べた。日本の朝食も豊かだった。洋風のトーストにヨーグルト、ベーコンサンドイッチ、生卵になめ味噌、ジュースやサラダもあった。中華風の白粥、コーン、カボチャ、紫芋などもあった。飲食の種類から見ると、本当に外国のものと結びついており、日本文化に特有の息づかいを感じた。栄養面から見ても、品種が豊富で健康に良いものであった。

第三に、日本のサービス精神も深く印象に残っている。日本の4つの図書館を訪問してみると、密集しているが整然とした自動化書架、配置が精巧で美しい施設、一心にサービスする職員、蔵書の中の読者、こうしたものが現代化した図書館にあるべき息吹を示しているような気がした。特に、細々とした設備、書架脇のツールや梯子、書架上の注意書き、読者交流室、休憩用カフ

ェや喫煙室など、全ては読者のためというヒューマナイズされたサービスが至る所に具現化されていた。

商業施設で買い物をした時、店員は絶えず微笑をたたえて様々な問い合わせに答えていた。また、度々お辞儀をすることもあり、言葉は通じなくとも本当に「お客様は神様」といった礼遇を受けることができた。品物を購入後、店員は購入された商品の紙箱にプラスチックの持ち手を付けて運びやすくしてくれた。日本の小さな通りを歩いていると、至る所で自動販売機を目にする。たばこ、酒、飲料、アイスクリームを売るものもあり、こうした品物が欲しい時にはとても便利である。

第四に、日本人の内気な性格は世界でも有名である。車窓から眺めると、狭い道路を往来する車両にはとても秩序があり、大声で話す、怒る、大音量のクラクションといった騒音はほとんど聞かれなかった。日本にいた数日間、交差点での信号無視も交通事故も全く見る事がなかった。東京の街はにぎわっているが、静かなのだ。行き交う通行人が慌ただしく頭を上げ、鞆を背負って、軽々しくしゃべったり笑ったりしない姿には自尊心が透けて見えた。この旅では本物の日本人とそれほど密接に接触することがなかった。言葉が通じない関係で、基本的に中国系日本人が案内してくれていたのだ。

空港を出て異国で出会い名前を呼べた最初の人、中国系日本人の顧文君先生である。最初、彼女の容貌と表情は本当に日本人のように見えた。敏腕そうなオーラが漂っており、身長は高くもなく、肌の色がとても白くきれいだった。礼儀正しく全員の手を握り終わるとすぐ、飲み物を選びに連れて行ってくれた。客人全員に自分の好きな飲み物を選ばせてくれたのである。これが顧先生の第一印象だった。入念で、周到で、全員の趣向を尊重する人。また彼女のこうした入念さと周到さは行程全体で一貫していた。最後が全くその極致で、私たちが空港に送ったときの待ち時間に彼女は手持ちのフェイスブラシを取り出した。数人いた電子炊飯器の購入希望者に印を付け混淆を防いだことには、感動してやまなかった。

何日か親密に接触してみて、顧先生は中日の両方を備える模範として恥じない人であると私はさらに強く感じた。上海人の頭のよさ、綿密な計算、周到さを備え、話せば早口で、万事に気遣いができる。さらに日本人の仕事熱心さで時間を守り、自分の事業を心から愛し、喜んで貢献する精神をも身につけていたのだ。

第五に、日本のホテルはどこも小さかった。首都東京は更に地価が高く、シングルルームは一般に一人が歩いて入るぎりぎりの広さだった。しかし、規模は小さいが、機能は完全に揃っており、室中の設備に欠けているものはなかった。トイレを彼らは“化粧室”と呼んでいたが、そこはさらに小さく、約2~3平米しかないが、中は全て揃っておりとても清潔で、わずかな臭いもなかった。ユニットバスは日本人が“カプセル式ボックス”と呼ぶそうだが、日本は地震多発国家のため、地震に遭うと日本人はトイレに避難しがちなので、トイレの天井には避難しやすいようにスライド板があるのだそうだ。救援が来た時、救出用機器でトイレ全体を引っ張り出すことができ、内部の部品に傷が付くこともないという。

第六に、日本人が時間を厳守する習慣である。見学訪問であれ、会見であれ、全ての時間が規

則正しく、きちんと手配されていた。ただ、これは一長一短だと思う。時間をきっかり守れば、融通が利きにくい。例えば、ホテルで六時半から朝食開始と言うと一分一秒の誤差もなく提供される。たとえ全ての準備が整っていようと、外に長蛇の列ができていようと、時間になってないと食事が始まらないというのは杓子定規に感じるだろう。

日本は礼節を重んじる国である。顧客、上司、先輩、見知らぬ人と対応するそれぞれの場面でそれが現れる。「礼は尽くしすぎることはない」という諺は、この国の高度な精神文明を表したものである。しかし、同時に日本人に礼節が多いということは、疲れることだろうとも思う。例えば、飛行機に乗る際、フライトアテンダントが絶えず一人一人の旅客に「こんにちは」と声をかける。日本にいた数日間で最も多く耳にした単語は「はい（そうです、ただし、よろしいなどの意味）」であり、これにはお辞儀が伴っていた。上級の幹部が接待の宴会を催す度、一連の儀礼的手順を踏む必要がある。双方の責任者の講話→記念品の贈り合いと記念撮影→並んで名刺交換→乾杯して食事開始。食事が始まると言っても、一気に料理が並ぶわけではない。食卓は横一列に並んでいるため、1つの長テーブルの両側に通常6~8人が座る。空間がとても狭いので、料理は一品ずつしか出されない。私たちの団体は人数が多かったので、給仕する担当者が一人だけだと、こちらでは一品を食べ終わっているのにそちらでは食べ終わっていないといった事態がよく起きた。何品か食べてから、担当者がひどく忙しそうなのを目にした。私たちの食事にかかる時間はちよくちよく予定の時間を超えていたのだ。

図書、社会、文化—日本視察の感想—

蘭州大学図書館館長 葉麗雯



2011年2月15日～2月22日、「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加して、日本視察の機会に恵まれた。期間中、4つの図書館を見学し、日本財団及び日本科学協会の責任者と会見した。また、学術報告を聴講し、学術交流を行い、寄贈図書の配送倉庫と作業の流れを現地視察した。訪問先のいずれもが深く印象に残り、

感じ取ったものはとても多い。

1. 図書寄贈事業に対する認識

1999年、日本科学協会が「教育・研究図書有効活用プロジェクト」をスタートさせた。日本の出版社、企業、大学、研究機関や個人が寄付した図書を整理、分類してから海外の大学や研究機関へ寄贈するというものである。現在、中国では28大学と1研究機関が受け入れ先に決まっており、合計239万冊の図書を受け取った。今回の訪日団は、日本科学協会の招聘により中国の寄贈対象機関が日本を訪問し、視察と交流を行うというものである。日本では、寄贈図書の配送倉庫と作業の流れについて説明を聞き現場を視察したことで、一冊一冊の図書が大変なものであることを深く認識することができた。寄贈図書には関係者の心血が凝縮されており、日本人の中国人に対する友好の気持ちが体现されているのである。寄贈図書の受入機関として、当大学が改善すべき業務は多い。私たちは、日本科学協会の図書寄贈プロジェクトの業務に積極的に協力し、業務に対する考え方のバランスをとり、業務の流れに精通して効率を高めるべきなのである。より重要なのは、寄贈された図書をしっかりと管理して十分にその効果を発揮させ、より多くの利用者に活用してもらい、本来の力を発揮させることである。

2. 図書館について感じたこと

日本では日本大学法学部図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館と国会図書館の4図書館を見学し、また、「日本の大学図書館の現状と最新の動向」に関する学術報告を日本女子大学の田中教授から伺った。日本の図書館に対する一定の認識を得ることができ、先進的な管理理念をたくさん学ぶことができた。

日本の大学図書館は、建物こそ大きくないが、内部施設が先進的で全体が綿密に配置されており、サービスが充実していて直ぐに利用できる。図書館の各種サービスガイド、図書分類表、図書全体の配置図などが随所で見られた。閲覧室にはほぼどこでも検索用のパソコンとコピー機が備えられている。館内には個人用の学習室と共用会議室が設けられていた。

日本政府は国民の読書を積極的に提唱しており「読書立国」を提唱している。日本国民は読書をとても重視しており、毎年の書籍購入量と読書量は世界でも上位に入る。日本では、情報化時代が訪れたとは言え、図書館で本を閲覧したり借りたりする利用者は減っていない。また、日本の大学図書館は92.1%が社会に開放されており、身分証明書さえあれば館内で閲覧することができる。

日本の図書館では管理が厳格で、利用者も文化的である。図書館内では携帯電話の使用と飲食が厳禁である。利用者は自主的に館内の各種規定を遵守しており、館内は静まりかえっている。

全ての資料は順序よく並べられており、図書の損傷は少ないようだ。個別の規定違反があっても指導するのが主で、懲罰はないらしい。図書館はコーナーに行っても非常に清潔で落ち着いている。我々の見学時は、案内担当者も声を抑えて話しかけてきた。利用者の邪魔を恐れてのことである。しかし、中国の大学図書館は、時間が経つほど自由市場のようになってきている。携帯電話で話す者、飲食する者、朗読する者がどこにでもおり、利用者の周囲にはごみくずが堆積している。閉館時の館内は非常に雑然としており、図書館の神聖さはすっかりなくなっている。日本の図書館では、利用者に貸し出す総数も期間も中国より恵まれている。国会図書館では完全に閉架書庫だが、貸し出しカウンターと書庫の間には自動搬送ベルトがあり、貸し出しも返却も速やかに行われている。大学図書館では教育サービスをより重視している。閲覧室では教授推薦図書のコーナーや参考書の紹介が見られた。

日本の図書館では図書館員の分担がはっきりしており、業務効率が高い。日本の図書館には専門資格を持つ館員が少なく、人材企業から派遣された非専門職員の方が多い。彼らの職務分担は明確で、それぞれ職責を尽くしており、業務効率は高い。これに比べ、中国国内の大学図書館ではここ数年の求人要件が高まりつつある。本科生から大学院生まで、普通大学卒業生から「985」「211」重点大学の卒業生までおり、有資格者とそうでない館員の区分がない。館員組織は巨大だが専門性が低く、結果として人件費が高く付いている。館員組織の前途は明るいとは言えず、人材の浪費が深刻である。

3. 日本社会に対して感じたこと

日本での見学期間中、日本の都市や社会、人文に対する理解や接触の機会についても日本側が配慮してくれていた。

日本の国土面積は38万平方にも満たないが、人口は一億三千万人もいる。人口密度は非常に高いと言うべきところだが、この地と中国の都市とは感覚が全く違うことに気づいた。どこもかしこも整然としており、人が多くともがやがやした感じはない。日本人は全体的に秩序を好み、列に並ぶのも自主的に正常に行われるのだ。例えば、エスカレーターでは、人々は左側に立ち、急ぐ人を通すために右側を空けている。こうした様々な振舞いは、とても快適なものに感じられた。同時に、日本国民の素養の高さに深く賛嘆した。

ガイドの解説によると、日本国民の素養の高さは優れた教育の賜であるという。日本の教育は発達しており、国民が教育を受ける程度も高い。また、「自分のことはしっかりやって、他人の邪魔をしない」ということは、日本人が小さい頃から注ぎ込まれた生活理念であるが、これにより日本人は日常生活においても素養の高い振舞いをするのができ、結果的に自分にも他人にもためになっているのだ。

日本の都市部では道路が狭い。東京も例外ではない。道路が狭い上、車両はイギリスと同様の左側通行で、中国国内で右側通行に見慣れている私のような者にとっては、狭さがより強く感じられる。高速道路も決して広くはない。中国のそのように幅広く、六車線や八車線あったりするところは珍しい。市街地で片側四車線の道路を見かけることは少なく、多くが対面片側二車線で、ひどい場合、幹線にもかかわらず、対面片側一車線だったこともあるが、意外にも渋滞はそ

れほど見られなかった。誰もが自主的に交通ルールを守り、車は歩行者に道を譲る。耳障りなクラクションも騒がしい人の群れもなく、全てに秩序があって平和な落ち着きがあった。我々が乗っていたバスが十字路で左折しようとした時のこと、対面片側一車線だったため、向かい側の車道を占用せざるを得なかった。その時、対向車線には5台の乗用車がいたが、皆が遠慮してバスを先に通してくれた。中国国内ではあまり見られない現象である。

日本の道路はとても清潔で、殆どごみが見あたらない。至る所に痰の跡やごみが見られる中国の景色とは明らかなコントラストを見せている。ガイドの紹介によると、日本ではごみの分類が細かく、ポイ捨てなどの行為に厳しい処罰があるからだそうだ。日本では、ごみは可燃物、不燃物、びん・缶・トレイ類に分けられている。聞くところによると、日本人は公共の場所で犬を散歩させる時には必ずごみ袋を持ち歩き、犬が排便するとすぐにその袋へ片付けて、ティッシュなどで地面を拭き取るという。

日本の社会は治安がよく、人々は信頼し合い、社会秩序が整っている。日本に滞在したわずか数日でも、鞆（パスポートと現金が入ったもの）をなくす、はぐれる（道に迷う）、衣服をなくすなどのことが起きたが、いずれもすぐに拾得者が警察や落とし主に届け出てくれて、無事に戻った。日本では全てのお手洗いにトイレットペーパーが置いてあり、常に何本か多めだったが、持ち去る者はいなかった。中国の首都空港にあるお手洗いは、ペーパーボックスが鎖で固定されている。その訳は想像が付く。

日本では人権が重視されている。図書館の見学時に教えられたのだが、利用者がいるところでは写真を撮ってはならない。たとえ遠路はるばるやってきた客人であっても利用者の人権を侵害することはできず、勝手に他人の写真を撮ってはならないという。皇居の外にある草地では数人のホームレスが青いテントを張っていた。他人の干渉を受けず自由に暮らしており、いささか意外に感じた。ガイドの紹介によると、日本ではこのようなホームレスは少なくないという。彼らの中には人材が埋もれており、必ずしも貧乏人ではないのだそうだ。日本人は、誰も他人の幸せな生活を奪う権利を持たないと信じているのだ。

日本の飲食文化は中国と大いに違っている。日本での食事はとても節約されたものだった。毎食、小皿が何枚かあるだけで、料理も小皿の底に載るほどしかなかった。しゃぶしゃぶも数人で肉と野菜が一皿ずつ、一人一つしか飲み物をとれなかった。日本の町中に太った人があまり見られないのはこうしたことが原因かもしれない。中国国内であれば、きっと料理も飲み物もずっと大量である。その結果、中国人の三高（高脂肪、高血圧、高血糖）比率が高く、健康面で劣るのだ。中国人は本当に日本人から学ぶべきだ。節約を励行して浪費に反対し、低炭素でエコ、また腹八分目は健康によい。

わずか数日の旅で見聞きしたものは表面的なものに過ぎない。正しいという自信もないが、日本の社会経済の発達、美しい自然環境、文化的で礼儀正しい国民はやはり深く印象に残った。

今回の日本訪問では、日本財団、日本科学協会および図書寄贈プロジェクト室の皆さんから心のこもった接待を受けた。特に最初から最後まで随行してくれた顧文君先生である。その周到的な手配とゆきとどいた配慮、厳格で実務的な仕事ぶりは深く印象に残り、我々はとても深く感動し

た。日本科学協会の伊藤常務理事は歓迎会を開いてくれただけでなく、わざわざ東京から大阪まで見送りに来てくださった。図書寄贈部門のAさん、Bさん、そして田中教授、通訳ガイドなどの皆さんにも大変お世話になった。きっと、この忘れがたい日々はお互いずっと覚えているだろう。中日両国民の友情が永遠に続くことを信じている。

訪日交流と視察の感想

貴州大学図書館館長 易寧



初めに、私たちの一行が日本での視察研修、情報交流を円満に完了させるため様々な支援を下された日本科学協会に感謝を申し上げ、また、顧文君先生、A先生には今回の各活動や視察について心のこもった手配を頂いたことにも深く謝意を申し上げます。

日本科学協会の招聘に応じて、2011年2月15日～22日、私は「第5回中国大学図書館担当者訪日団」一行に参加した。一衣帯水の隣国である日本を訪れ、日本大学などの図書館と、寄贈図書整備委託会社を見学した。見学、視察、学習の期間中、私たち一行は日本科学協会と図書館業界の同僚から心のこもったもてなしを頂き、学習考察する任務を順調に完了することができた。収穫は実り多い。

日本の大学図書館は、設備の現代化だけでなく、リソース構築、図書情報サービス、ネットワーク構築などの面においても世界一流の水準であり、図書館事業の発展が非常に速い。科学的で人間的な管理により、図書館の文化的特色が形成されているため、図書館はとても科学的に図書文献資料を管理し、正確且つスピーディーに一流の情報サービスを読者へ提供できる。このため、幅広い利用者が存在し、大学内外における図書館の影響力は拡大している。今回の日本視察期間は短かったが、日本の大学図書館における各種管理やサービス業務は深く印象に残り、強い啓発となった。

1. 学生の情報リテラシー教育

学生が図書館を利用する際の情報検索の経路や方法を指導している。教育課程に『情報技術と利用』、『情報検索』などを追加している。また、「データベースの検索方法」、「論文、レポートの書き方」といった講座を開き、学生の情報リテラシーを向上させている。

2. 図書館リソースに関する宣伝と研修

様々な形式の講座、展示、研修、研究といった形で図書館リソースの宣伝を行い、リソースの利用率を高めている。

3. 図書館の配置調整による利用環境の改善

多くの大学図書館ではAVホール、資料館、録音録画室を設けている。資料館では日本や世界の国々の関連ビデオ、VCD、DVDなどを貸し出しており、AVホールでは、読者が無料で録画や映画を見ることができる。他にも小型ミーティングルームや、読者カウンセリング室まで設けているところもあった。話題の小説や学術論文などに対する研究討論や交流ができたり、利用者の心理カウンセリングができたりもする。学生の長時間学習に休憩が必要であることを考慮し、図書館には喫茶室なども設置されている。

4. 科学的でヒューマナイズされた管理

日本の図書館では、閲覧室であれ、書庫であれ、密集書庫を含めて、図書がきちんと並べられており、清潔で埃ひとつついていない。書架では、長らく誰も読んでいない図書で

も非常に清潔であった。分かりやすく図書分類を表示するため、書架の色を図書の種類ごとに分け、異なる位置にある図書内容を示すため、蛍光灯の色を使い分けるといった手法がとられている。利用者の便宜を図るため、利用率が高い図書は手に取りやすい低層書架に、利用率が低い図書は高層書架や密集書架に配置されていた。また、試験前の試験準備期間には閲覧席を大量に追加し、学生の便を図っている。

5. 古書、古籍のしっかりした保護

貴重図書に対しては一連の保護措置がとられている。図書館では毎年、定期的に書庫の燻蒸と整理を行っており、空調を利用して書庫の温度と湿度を厳格に管理している。室内には紫外線を防ぐ蛍光灯が採用されており、虫害を防ぐための燻蒸技術などによって図書を保護するとともに、密閉扉を利用して通路を遮断し、気圧を引き上げている。いくつかの貴重な資料に対しては、複製、縮写、デジタル化などの手段を利用したメディア交換を行っている。破損した書籍や雑誌に対しては、のり、特殊な紙、皮革を使って修復を行っている。このほか、コピー機やカメラによる図書の複製を採用し、図書を保護している。

6. 図書館リソースの利用範囲を拡大

日本の大学図書館の一部では「資源は共有、本は人のため」の原則に従い、リソースを全社会に開放していて、開放の形式には二種類ある。一つは、大学図書館の間で図書資料が相互利用できるというものである。各国立大学の教官や大学院生は、所属する大学の図書館が発行した「閲覧証」さえあれば、全国どこの国立大学図書館でも文献資料の閲覧と複製ができる。もう一つは、一部大学図書館の図書資料が所在地の住民に開放されているというもので、市内に在住、在勤、在学する人は誰でも図書館で本を借りることができ、登録時に自分の氏名と住所を証明できるものさえあれば、利用証が発行され、保証金はかからないのだ。こうして一部大学図書館が社会に対してサービスを展開することにより、大学の図書資源が十分に利用されると同時に、大学図書館の社会的地位と知名度も高くなる。

7. 上級生による図書館資料の利用方法や検索に関する指導

高年次の学生有志がボランティアとして自由時間に「データベースの検索方法」を利用した図書館資料やネット上の情報資料検索について新生に初歩から教えることにより、最も基本的な資料情報の検索方法が把握できるようになっている。

訪日感想

雲南大学図書館副館長 樊泳雪



2011年の初春2月、春の足取りとともに、財団法人日本科学協会が実施した「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加してきた。全国24の大学図書館の同僚達と共に、2月15から22日までの8日間で、日本大学法学部図書館、国立国会図書館、関西学院大学図書館、同志社大学図書館を訪問見学し、各訪問先では日本の同業者から心のコもった歓迎を受けた。

8日間というごく短い期間で東京、大阪、京都、沖縄などの各地域を訪問見学し、多くの日本人と実際に触れ合うことにより、日本人の入念さ、時間への厳格さ、礼儀正しさを知り、友好により深い感銘を受けた。見学した図書館も深く印象に残り、よい良い啓発となった。

1. 質朴簡素

2月17日、国立国会図書館を見学した。同館は「図書その他の資料を探し集めて国会議員の公務を助けると同時に、行政や司法の部門及び日本国民に法律で規定された図書館サービスを提供する」ことを目的としているため、国立国会図書館のサービス対象は、国会議員、政府機関、一般大衆であると規定されている。中でも筆頭は国会へのサービスであり、同館のサービスの重点事項となっている。国立国会図書館は法で定められた唯一の納本図書館である。同館が収集する国内出版物は、日本の文化遺産として永久に保存されるため、保存図書館の機能も担っている。全館は灰色を基調とし、国立図書館と言えども、豪華な追加的装飾がなかったことは、不思議に感じた。検索ホールの柱は全て打ち放しのコンクリートで、何ら装飾が施されておらず、床面も普通のセメントだった。ホール中央は電子スクリーンで、図書の検索情報がスクロール表示されていた。読者は快適な閲覧席で、静かに検索結果を待っていた。鮮やかな装飾はなく、ホール全体には静かで重々しい雰囲気があった。見学した四つの図書館は、いずれも内装がシンプルで、設計者の心遣いは図書館機能と読者の便宜に注がれていた。

2. 省エネで実用的

日本は国土面積が狭く資源に乏しい。そのため、国民の省エネ意識は各方面で体现されている。街を走る車は多くがQQのような省エネ仕様車で、排気量の大きいファミリーカーはあまり見られなかった。ホテルのユニットバスは6平米もなかったが、機能は揃っており、精緻で美しく、便利で実用的なものだった。図書館では、電力の使用と空間利用に省エネ意識が現れていた。図書館は電力の大口ユーザーで、読者の閲覧には十分な光源が必要なのである。見学した図書館では、通常照明による光源のほか、閲覧に必要な光源はどこでも独立したものであった。閲覧室の各席にデスクライトが備え付けられ、読者が必要な時に点灯し、離席時に消灯する仕組みである。書庫の光源は書架上に設置されており、音声制御で、人が書架に近づくと自動点灯し、離れると自動消灯するというものだった。こうした設計は省エネであると同時にヒューマナイズされたものでもある。

3. ヒューマナイズ重視のサービス

日本人は「他人に迷惑をかけない」ことを尊び、また、できるだけ他人へ便宜を図ろうとする。このため、サービスのヒューマナイズはどこでも重視されている。例えば、見学した図書館は、大学のものであれ公共のものであれ、何れも喫煙室が設けていたが、これは意外だった。図書館は重点防火施設であるため、火気厳禁なのである。喫煙は他人に影響を及ぼすだけでなく、深刻な事故を引き起こす可能性もあるにも関わらず、喫煙者の便宜のため、日本の図書館には喫煙室があるのだ。もう一つの例を挙げると、日本に到着して気づいた奇妙な現象なのだが、タクシーのバックミラーがドアでなくフェンダーに置かれていることだ。後で知ったのだが、バックミラーがドアにあると、運転手がミラーを見る時に乗客の方を振り返りがちになり、乗客に不便や不安をもたらす恐れがあるため、タクシーのバックミラーはフェンダーに取り付けられているのだそうだ。この話を聞いて、注意深さと周到さに感心せざるを得なかった。

今回の訪問期間は長くはなかったものの、収穫は多かった。この隣国に対してより全面的な理解ができたと思う。日本人の情熱、客人を歓迎する心は、私の心に素晴らしい印象を残した。彼らの厳格さ、質素さ、沈着さ、穏やかさ、儉約の精神は、私達が学び参考とするに値する。

訪日の雑感

広西師範大学図書館館長 蔣芳生



2011年2月15日から22日まで、日本科学協会の招聘を受けて、同協会の「中国大学図書館担当者訪日団」に参加し、8日間の訪日交流を行った。今回の訪日は日本科学協会の「第5回中国大学図書館担当者訪日交流」で、幸い参加者となった私にとって、今回の訪日活動が初めての日本訪問でもある。

日本科学協会は、今回の訪日活動を重視し、十分な準備と綿密な手配をしてくれた。訪日交流はわずか数日間だったが、内容は豊かで、感銘は非常に深く、収穫は大変多かった。

訪日団は始めに日本財団本部を訪れ、同財団の笹川会長にお目にかかった。ご多忙の中で接見下さった会長は、会見し、質問に答え、親切に訪日団員の一人一人と記念撮影をしてくださった。私の印象では、笹川会長はまず碩学であり、慈悲深く、才知のある方というものである。会長は父上の博愛精神を受け継ぎ、世界中の壮大な公益事業に傾倒され、中日の文化交流を促進し、人類の知識の伝播を推進することに全力を尽くされておられることには、本当に頭が下がった。

我が大学図書館に戻って日本の寄贈図書閲覧室に入ると、多くの読者が一心に寄贈図書を読んでいる姿が見受けられた。たちまち、読書空間に漂う濃厚な博愛の息吹を感じ、笹川会長の影が閲覧室に見えるかのような思いがした。

今度の訪問では、日本財団、日本科学協会の手厚いもてなしと熱烈な歓迎を受けた。日本財団からは前田常務理事など数人の方が交流活動に参加され、日本科学協会の大島会長は訪問団に接見され、伊藤常務理事は自ら出迎え、最後にはわざわざ飛行機で大阪に駆けつけて見送りをしてくださった。日本科学協会の職員も全行程に随行してくれた。日本財団本部でも、各図書館でも、非常に親切な対応を受けた。関西学院大学図書館を見学した時には、同大学の杉原学長が自ら送迎してくれた。沖縄の豊見城市を見学した時には、市当局が歓迎会を開催し、中国古代の聖人である孔子の語録「遠方より朋来たる、また楽しからずや」という横幕を掲げ、宜保晴毅市長が心のこもった歓迎の挨拶をしてくれた。行く先々でこうした細やかな思いやりのある数々のできごととに遭遇し、日本財団、日本科学協会などの日本の友人や多くの日本国民の中国人民に対する深く厚い情誼を感じ取ることができた。

訪日するまで、寄贈図書の出どころや収集活動の過程がよく分かっていなかった。今回の訪日では、座談会や交流会のほか、寄贈図書の整備・保存の拠点を見学する機会も得られた。そこでは、日本全国の各地から集められた本が整備、保管、仕分け、配送される過程が複雑ながら厳密に管理されている様子を目の当たりにすることができた。この情景を見たことにより、日本科学協会の寄贈図書が非常に重いものであるということを感じることができた。図書の一冊一冊には、同協会の図書寄贈事業の責任者である顧先生とそのチームの心血が凝縮されているのだ。彼らの十年余りの努力は正に中日の文化交流を促進するためのものであり、両国民の友情を増進するために有益なことであると思う。図書の寄贈を受ける一図書館の責任者としては、深い中日友好の情が詰まった書籍を最も効果的に利用すべきなのである。そうすることが、日本財団、日

本科学協会、顧先生とそのチームに対する一番の恩返しとなるのだろうと思う。

訪日期间中、田中功教授から日本の図書館に関する学術報告を伺い、国立国会図書館、日本大学法学部、関西学院大学、同志社大学の各図書館を見学した。日本の図書館に対する理解を深め、日本の図書館における先進的な管理とサービス理念について多く学んだことは、今後の中日両国の図書館業界における交流や協りに確かな基礎となった。

日本を訪れて目にしたのは、発達した経済、優美な環境、良好な治安、高度な文明で、これらは経済大国、礼儀の国の名に恥じないものである。最も賞賛すべきは、日本国民の仕事熱心さ、厳格さ、文明の素養と革新の追求であり、我々が学ぶに値するものである。

今回の訪日期间は短かったが、素晴らしい記憶がたくさん残っている。早春の二月、東京には雪が舞っていた。我々が日本の地に足を踏み入れた時、空は晴れ、日の光があまねく照らしていた。光り輝く日光、藍色の空は日本での素晴らしい気持ちを映し出すものであろうと思う。日本の桜は毎年4月に咲くそうだが、皇居広場を通り過ぎた時に一本の桜が満開だった。炎のようでもあり、艶やかな美しさだった。我々を歓迎して咲いてくれたのだろうと思う。素晴らしい気持ちと追憶を胸に祖国へ帰るにあたって、日本財団、日本科学協会、日本の友人の、深い情誼と中国の教育事業に対する惜しみない支援に、心から感謝している。日本科学協会の図書寄贈事業が益々よいものとなるよう、中日の文化交流が絶えず発展し、中日両国民の友情が長く続くよう心から願って。